

京都市歴史資料館

2024年度(令和6年度)特別展

賀茂季鷹と古典の「知」

京都市歴史資料館寄託山本家資料展

京都産業大学・国文学研究資料館

古今和歌集よき弟三
上徳哥二
題五
小野小町
妹にりせハササ
とエツム



か ものすえたか
賀茂季鷹 (1754～1841)

1-3『季鷹肖像(模本)』より(部分)

みよしの
三芳野のよしや雲にはまがふとも

雪とな散りそ山さくら花

もみぢ
薄く濃き木々の紅葉はさだめなき

しぐれの雨やそめ渡しけむ

(季鷹)

きのひろなり
紀広成画『季鷹県主肖像(正本)』添付目筆和歌色紙より

ごあいさつ

ようこそ、「賀茂季鷹かものすえたかと古典の「知」——京都市歴史資料館寄託山本家資料展——へ。

このたび、賀茂季鷹（姓山本）の後裔こうえいにあたる山本家（京都市北区）が伝襲でんしゅうする古典籍類を取り上げて、それら貴重資料の寄託先である京都市歴史資料館において、特別展示を開催する運びとなりました。

賀茂季鷹（一七五四―一八四二）は、賀茂別雷神社かもしわけいかづち（上賀茂神社）の神職山本家の人で、江戸時代後期を代表する歌人です。和歌・和学を基盤としつつ書にも狂歌にも通じ、別荘「雲錦亭うんきんてい」に造営した文庫には和漢にわたる書物数千巻を蔵したと伝えられる、当代きつての知識人でありました。

このたびの展示では、賀茂季鷹を中心とした江戸の「知」の実相とその豊かさを感じ取っていただくために、全体を三部に分かつて紹介します。皆さまには、展示された古典籍類のさまざまな表情を楽しんでいただくとともに、季鷹を生んだ杜家しゃけの文化の広がりとお興行きに思いを馳せていただければ幸いです。

本展示は、わたくしども四者が互いに協力して初めて実現したものであり、国文学研究資料館の共同研究「京都市歴史資料館寄託山本家所蔵資料など賀茂両社および杜家伝来の古典籍資料に関する研究」（代表小林一彦かずひこ京都産業大学教授・日本文化研究所長）の研究成果を反映しています。展示開催にあたり御懇篤ごこんとくなる御教導かたじけなを忝かたじけなくした、京都市文化財保護課をはじめとするすべての関係者各位に、心より感謝と御礼を申し上げます。

賀茂杜家の香気かうきある文化を、心ゆくまでご堪能下さい。

二〇二四年（令和六）一〇月一九日

京都市歴史資料館長	井上 満郎 <small>みつお</small>
山本家当主	山本 義浩 <small>よしひろ</small>
京都産業大学長	山本 敬子 <small>けいこ</small>
国文学研究資料館長	在間 敬子 <small>ざいま</small>
	渡部 泰明 <small>わたなべ</small>

展示に寄せて

このたびは、山本家に受け継がれてきた古典籍の特別展示にご来場いただき、まことにありがとうございます。

賀茂季鷹かものすゑたかとその子孫が残した膨大な蔵書は、先代当主が存命の折に九州大学へと寄託され、その後京都市歴史資料館に移管されて京都市指定文化財となり、多くの研究者のご尽力でその全容が明らかにされ、二〇一一(平成二三)年には京都市歴史資料館において特別展「賀茂季鷹とその文学」が開催されました。それから一三年を経た今回の展示は、歌人としてだけでなく、国学を修め、東西の文人と広く交流した知識人としての季鷹、そしてそのような人物を生み出した社家文化しゃけに関する、重層的な共同研究が反映されたものとなっています。

数千巻とも言われる書物を蒐集しゅうしゅうした季鷹は、今からおおよそ二七〇年前、宝暦四年(一七五四)に生まれ、幕末の混乱に至る前の比較的安定した時代を生きました。地下官人じげとして有栖川宮ありすがわのみやの諸大夫しよだいぶを務めた季鷹は、江戸にも遊学し、町人文化が発展した江戸後期の文化風土を存分に吸収したことでしょう。軽妙洒脱けいみょうしゃだつな書や狂歌を能くする一方で伝統的な古典文芸を愛し、雅俗がぞくどちらの道にも親しんだその文化的混雑性は、商業出版による木版本と教養人の手による写本が混在する時代の文化状況がもたらしたのかもしれない。

江戸から戻って上賀茂神社に祠官しかんし、社家町に雲錦亭うんきんていを構えた季鷹は、さまざまな文人墨客ぼっかくと交流して京都歌壇を盛り上げることになりましたが、その活動の基盤にあったのが古典籍類だと言えます。研究成果が手ずから書き込まれる書物は、読むことが書くことと直結し、新たな知のネットワークが生成される場をもたらしただけです。この機会に、そのような知の結晶を育んだ文化に触れていただければ、季鷹の末裔まつえいとして非常に喜ばしく思います。

最後になりましたが、本展示に携わられた関係者各位に、厚く御礼申し上げます。この特別展が、皆様にとって新たな刺激となることを願っております。

山本家当主 山本義浩

目次

ごあいさつ	3
展示に寄せて	4
賀茂季鷹略年譜	6
山本家系図	7
賀茂季鷹の業績をそのままに 山本家コレクションの奇跡	8
第一部 「みやび」への憧れ	9
【コラムA】古今和歌集	28
【コラムB】源氏物語の世界	29
【コラムC】テキストと書き入れ	30
第二部 季鷹の文芸活動	31
【コラムD】京都の国学と上賀茂の文庫	43
【コラムE】賀茂季鷹の魅力	44
第三部 上賀茂社家としての山本家	45
【コラムF】上賀茂の季鷹	52
【コラムG】賀茂の水流と社家町の風土	56
〈紹介〉国文学研究資料館	57
〈紹介〉京都産業大学	58
〈紹介〉京都市歴史資料館	60
出品リスト	62
主要参考文献一覧	63

凡例

- 一、本冊子は、京都市歴史資料館において、二〇二四年一〇月一九日（土）から一二月二四日（日）まで開催する特別展「賀茂季鷹と古典の「知」―京都市歴史資料館寄託山本家資料展―」の展示リーフレットである。
- 一、作品の解説は簡潔を旨として、平易な記述を心掛けた。
- 一、執筆者による推定事項には（ ）を付し、改行は「/」で、漢数字はイチゼロ方式で示し、文字は通行の字体に従った。
- 一、執筆は、国文学研究資料館特定研究（地域資料）「京都市歴史資料館寄託山本家所蔵資料など賀茂両社および社家伝来の古典籍資料に関する研究」のメンバーがこれに当たり、小林一彦・松中博・神作研一・中西智子の四名が全体を整理するなど編集責任を務めた。編集に際しては、佐藤崇国文学研究資料館総務課 課長補佐の格別のお力添えを賜ったことも明記する。
- 一、「コラムG」は鈴木康久京都産業大学教授に特別寄稿いただいた。
- 一、展示は、京都市歴史資料館の松中博歴史調査員が主としてこれに当たった。

国文学研究資料館特定研究（地域資料）

京都市歴史資料館寄託山本家所蔵資料など賀茂両社および社家伝来の古典籍資料に関する研究（二〇二二―二四年度）

《研究代表者》小林 一彦（京都産業大学教授・日本文化研究所長）

宇野日出生（小槻大社宮司）

大山 和哉（同志社大学助教）

神作 研一（国文学研究資料館副館長）

雲岡 梓（京都産業大学准教授・日本文化研究所員）

中西 智子（国文学研究資料館准教授）

松中 博（京都市歴史資料館歴史調査員）

宮武 衛（京都大学非常勤講師）

盛田 帝子（京都産業大学教授・日本文化研究所員）

渡辺悠里子（京都大学大学院生）

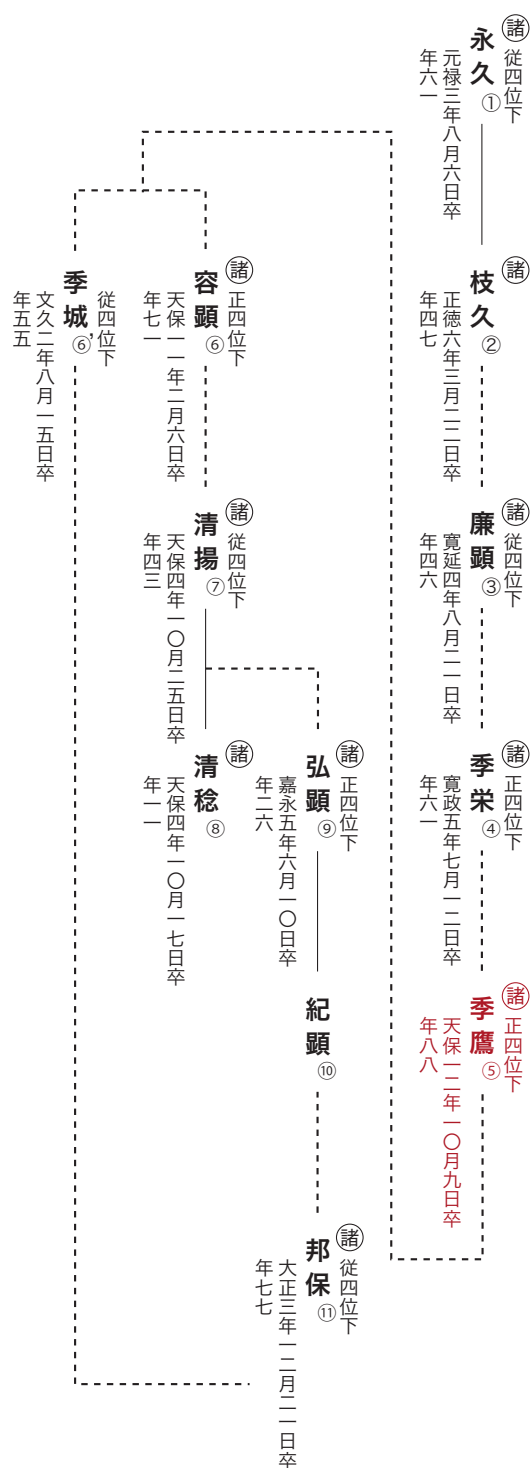
賀茂季鷹略年譜

和暦(西暦)		年齢	季鷹の事績	家族・知人の事績
宝暦4(1754)	1	2・6	山本季種の長男として一乗寺村(現京都市左京区)に誕生。後、季栄・山本廉頭の養子婿となり山本家を相続)の養子となる。初め一季と名乗る。	実父季種は、賀茂社家一六流の内の「季」族。長季の三男。
明和2(1765)	12	6・25	諸大夫として有栖川宮のお傍にあり、正六位下に叙せられる。	
明和5(1768)	15	1・5	季福に改名。8・15 有栖川宮家の当座歌会で富士谷成章・日野資枝等と同席。	10・22 有栖川宮職仁親王没。10・13 賀茂真淵没。
明和6(1769)	16	12・18	有栖川宮家当座歌会において織仁親王から添削を受ける。	
明和7(1770)	17	3・29	有栖川宮諸大夫並びに官位を辞し、御暇を給う。御家来「召し放ち」の御沙汰あり。	
明和9(1772)	19	1・	初めて江戸に下向。	
安永5(1776)	23	11・	自著『伊勢物語傍注』の凡例を記す。	
安永6(1777)	24	春	季鷹著『枕辞一言抄』(二島景雄跋)成る。	2・8 父季栄、二月一日に江戸城に登城し帝鑑之間に於いて御目見。
安永7(1778)	25	父季栄の江戸下向の際に対面。		10・2 富士谷成章没。
安永8(1779)	26	8・14	三島景雄が主催する「角田川扇合」に執筆として参加。	9・6 長女鷹子が誕生。10・15 山岡明阿没。
安永9(1780)	27	閏5	三島景雄が主催する平家物語寛宴の歌会に、講師として参加。義憤亭(季鷹の邸宅)で兼題・当座歌会を行い、三島景雄・加藤千蔭等が出席(以後天明7年まで)。	
安永10(1781)	28	8・10過ぎ	隅田川の畔の木母寺で「十番虫合」が行われ、歌の判者として参加。12・8 井上蟻雄より請われて歌論書『詠歌概言』を書き上げる。	8・16 季鷹の師荷田御風没。
天明2(1782)	29	4	安田躬弦が季鷹著『正誤仮名遣』の跋文を記す。11・19 『春秋のあらそひ』の識語を記す。	2・2 荷田蒼生子没。
天明4(1784)	31	春	加藤千蔭宅で『源氏物語』の講義を始める。	
天明6(1786)	33	6	『正誤仮名遣』の凡例を記す。8・15 深川で季鷹送別の宴が催される。9 『源氏物語』の講義終了。	8・6 季鷹の祖先賀茂永久県主の百年忌が行われる。
天明8(1788)	35	春	一時的に京都に帰郷する。安田躬弦・石川恒之主催の「花歌合百番」で歌の判者となる。	
寛政1(1789)	36	7・18	富士登山のため江戸を出立、24日富士山に登り頂上泊、8・12に帰宅。	2・10 加藤千蔭『万葉集略解』を起稿。
寛政2(1790)	37	3・	加藤千蔭が判者を務めた「十七番歌合」に出座。	7・12 父季栄没、享年六十一。
寛政3(1791)	38	3・25	本居宣長と初めて対面。この年、家督を継ぐために妻子と共に上賀茂に帰郷したか。	
寛政5(1793)	40	1・21	従四位下に叙せられる。4・18 遊学中の御礼を兼ねて江戸に下向。	
寛政7(1795)	42	7・	富小路貞直等と義仲寺を巡って上賀茂に帰るまでの紀行『田上日記』を記す。	
寛政9(1797)	44	4・5	従四位上に叙せられる。	7・11 小沢蘆庵没。8・29 本居宣長没。
寛政11(1799)	46	4・22	『かりの行かひ』の序文を記す。12・20過ぎ 上賀茂の別荘「雲錦亭」に移るか。	5・6 一人娘の鷹子没。
享和1(1801)	48	9・25	『かりの行かひ』の出版許可(割印)あり。	5・
享和2(1802)	49	1・26	近衛家の内々月次歌会に詠進する。3・ 若狭に下る。	大愚歌合に詠進していたため処罰された富小路貞直が季鷹に書状を出す。10・26 実父季種没。
享和3(1803)	50	3・	『古今集』(契沖本模刻刊本)の識語を記す。	
文化1(1804)	51	4・7	正四位下、安房守に任ぜられる。9・ 『万葉集類句』の凡例を記す。	3・ 妙法院宮真仁法親王が江戸に下向し、加藤千蔭・村田春海・三島自寛(景雄)を召す。6・20 橋本経亮没。8・9 妙法院宮真仁法親王没。
文化2(1805)	52	1・24	『和訓栞』中編を校合した御礼として、谷川士逸から『和訓栞』を恵まれる。	7・25 伴高蹊没。
文化3(1806)	53	3・	季鷹校正『唐物語』出版。	9・2 加藤千蔭没。
文化5(1808)	55	3・18	雲錦亭内に、歌仙堂を造り終えて当座歌会を催す。9・16 歌仙堂落成の祝に、海部屋善一より『清輔朝臣片仮名古今集 下』を進呈される。	7・12 父季栄の一七七忌に歌を詠む。
文化6(1809)	56			
文化8(1811)	58			
文化9(1812)	59	9・16	六〇歳の賀会を催す。この年の石清水臨時祭再興の際、広橋胤定から能宣朝臣の錯乱した歌についての質問あり。	4・26 三島自寛没。
文化10(1813)	60			

文化11(1814)	61	3・	『賀茂季鷹六十賀宴歌』出版。
文化13(1816)	63		契沖冠註・河本公輔校・賀茂季鷹主関『菅家万葉集』刊行。
文政1(1818)	65		この頃長崎に遊ぶ。
文政3(1820)	67	6・22	江戸滞在中、両国橋畔の大斗楼で大田南畝・南宮平甚と宴会を行い、扇面に狂歌を記す。9・2 松平
文政4(1821)	68	8・9	江戸の両国広小路でらくだ二頭を見学し、狂歌を詠む。10・7 七〇歳の寿筵を京都東山円山の端寮座敷で開く。
文政5(1822)	69		上賀茂とは別に御幸町二条北に寓居。
文政6(1823)	70	5・	『富士日記』刊行。9・この年、大坂の料亭浮瀬で、七〇歳の賀会を行う。
文政9(1826)	73		石川雅望著『雅言集覧』(「い」「か」まで)に序を贈る。
文政10(1827)	74	4・	水野忠邦に召されて歌を詠む。
文政12(1829)	76	3・21	以文会の会主となる。この年、市川団十郎との狂歌の贈答あり。
天保1(1830)	77	3・21	東山碧雲楼で以文会会員が尚齒会を開く。季鷹も出席し、序文、和歌を記す。
天保2(1831)	78	3・18	雲錦亭で花宴、長治祐義歌を詠む。
天保3(1832)	79		季鷹が以文会の会主となり、雲錦亭で別会を開く。5・1 賀茂の馬場で競馬を見、和歌を詠む。
天保4(1833)	80	3・10	9・『歌仙堂書籍出納録』の運用開始。
天保7(1836)	83		
天保11(1840)	87		
天保12(1841)	88	春	『嵐山栽花帖』を刊行。10・病のため床に就く。10・9 没、享年八八。

(盛田)

山本家系図



※盛田帝子「賀茂季鷹の生いたちと諸大夫時代」により、一部修正した。点線は養子関係。⑩は有栖川宮家に諸大夫として仕えたことを示す。

賀茂季鷹の業績をそのままに

山本家コレクションの奇跡

上賀茂社家の名家、山本家の蔵書は、賀茂季鷹により蒐集された典籍を中核に蓄えられた、すぐれた蔵書群です。現在は京都市歴史資料館に寄託され、保管されています。すでに藤本孝一・万波寿子両氏の「山本家典籍目録―賀茂季鷹所持本―」（『京都市歴史資料館紀要』二二号、二〇〇七年）があり、その分類によれば、叢書三点、目録一〇点、神道二二九点、仏書二点、思想二四点、辞書三〇点、物語六七点、随筆五二点、日記文学一七点、歌書四七二点、懷紙一七点、音楽一六六点、芸能二四二点、美術一八八点、史書二二二点、故実二四二点、儀式四六二点、記録七二二点、地誌三八二点、医書八二点、教科書四五二点、漢籍五七二点、あわせて二二二二点にのぼります。国指定の重要文化財「清輔本片仮名古今和歌集」（鎌倉時代中期頃の書写）のほか、数多くの典籍が京都市文化財に指定されており、その貴重さは推して知るべしといえます。写本が約三分の二を占めますが、慶長期（一五九六―一六一五）の古活字版『竹取物語』や『蜻蛉日記』、古辞書の『節用集』（慶長一六二二）など、刊本にも見るべき優品が含まれています。また『孟子』（明治七年刊）、『資治通鑑』（同一七年刊）、『島津久光公実紀』（同四二年刊）等々、近代の刊本の存在は、季鷹の没後も、よく蔵書が保たれ成長していたことを物語っています。学者の蔵書は、死後に散佚してしまうのが世の常ですが、季鷹の蔵書は例外で、ご子孫の手により大切に保存され、ほぼ完全な状態で現在に伝えられていたのです。歌書、物語、その蔵書には、おびただしい書き入れが認められ、特徴となっています。季鷹は江戸でも京都でも寸暇を惜しんで、本を人から借りては筆写にこそし、あるいは手元の本に異同を転記し、証本（依拠すべき確かなテキスト）の姿を生涯追い求め続けた文献学者でした。今後、書き入れの分析から未発見のテキストが立ち現れることも大いに期待されます。賀茂の地域資料としてはもちろん、江戸時代の国学者の業績をありのままに保存し後世に伝えるコレクションとしても、きわめて価値が高いといえるのです。

第一部

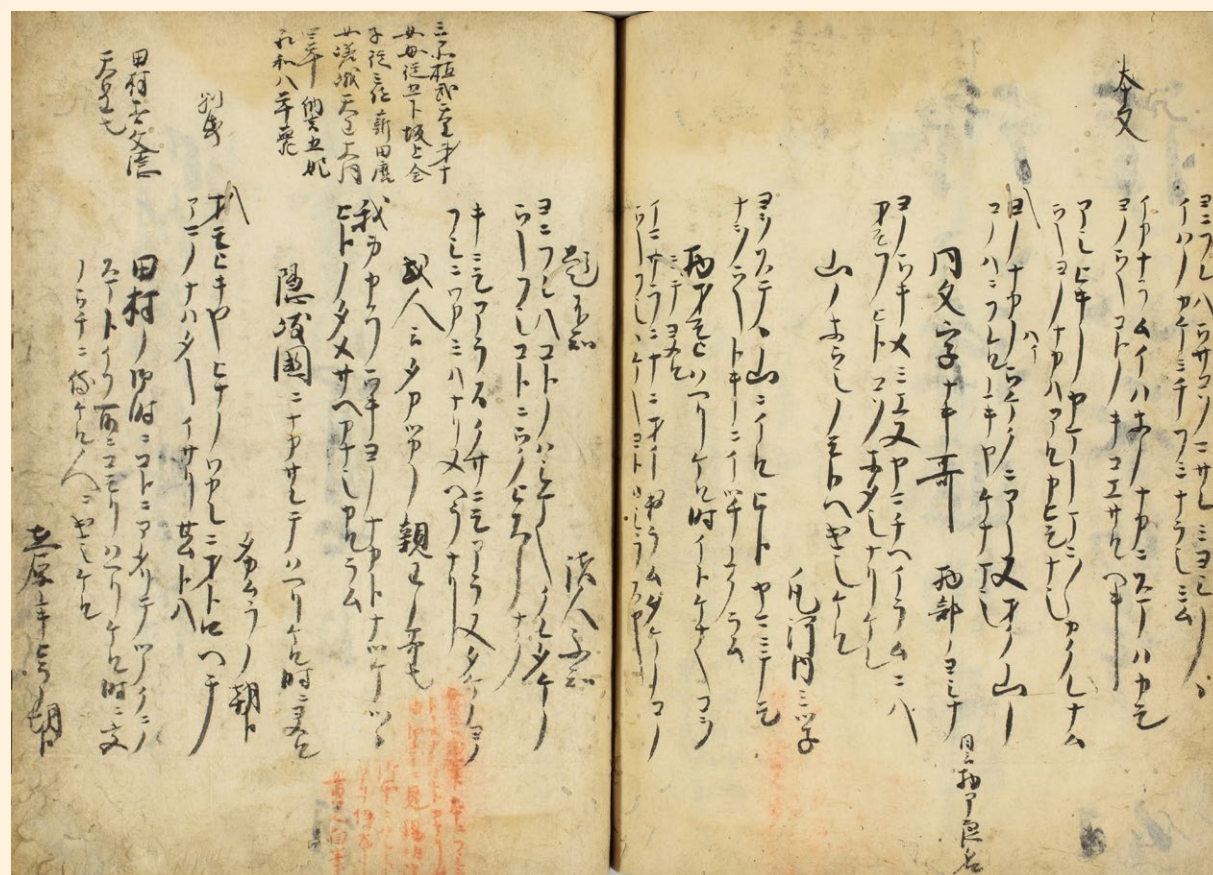
「みやび」への憧れ

皆さんは、たとえば「王朝のみやび」と聞いてどんなことを思い浮かべるでしょうか。天皇とあまたの后妃たちの住む内裏を中心にひろがる、紀貫之などの有名な歌人たち、また紫式部や清少納言など百花繚乱の才媛たちが活躍していた空間、そこで行われる四季折々の詩歌管絃の宴、居並ぶ公卿たちのたたずまいといった平安時代の華やかなイメージは、現代ではドラマなどの映像化作品によっても楽しく想像されるところです。

本展示の主人公、古典学者の賀茂季鷹が活躍した近世後期は、古き良き「みやび」に対する憧れの機運が高まった時代でした。一方で、人々の間には、それらに身近な形で親しみたいという欲望もあり、彼らの雅・俗の二つの方向へと向かう力のせめぎ合いが、新しい文化・文芸の発生の強力な磁場となっていたと考えられます。そこでは大名から文人、遊女、庶民に至るまでさまざまな階層の人々が、書く・読む・見る・着る・飾る・遊ぶ、あるいは食べるといった日々の営みの中に「王朝のみやび」のエッセンスを注ぎ込み、当世風の斬新な文学作品や美術工芸作品などがさまざまな生み出されました。また同時に、国学や儒学の方面から、学問としての古典探究がますます多角的に行われた時代でもありました。

まず第一部では、初公開の歌集類を中心に、そうした刺激に満ちた時代を生きた季鷹のコレクションをご紹介します。多くの名歌を生み出してきた賀茂県主の一族に連なる者として、神に仕える身として、季鷹が心を寄せた「みやび」の息吹を伝える名品の数々をご覧ください。

(中西)



1-1

清輔本片仮名
古今和歌集

季鷹翁珍藏の名高き洛の名宝、今ほしいままに

藤原清輔(一一〇八―一二七七)が書

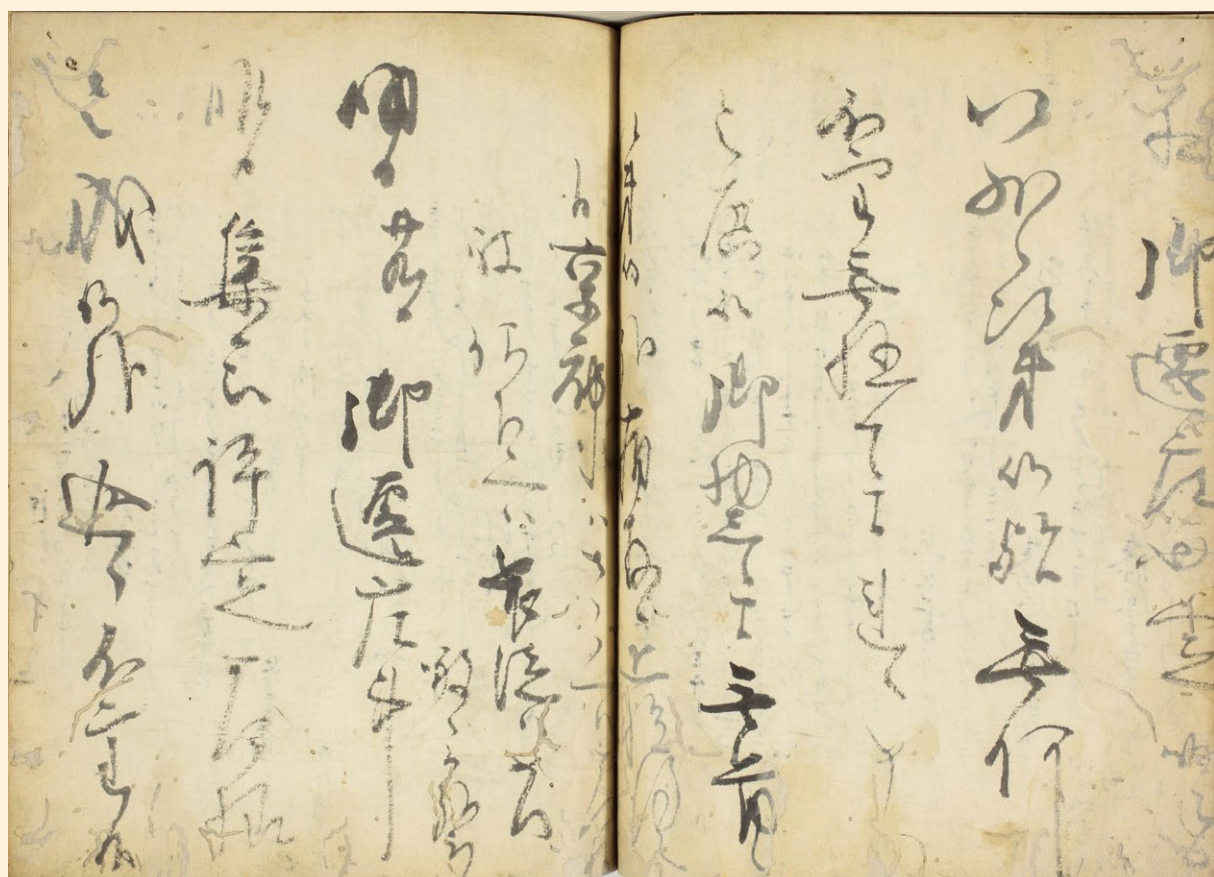
写した、いわゆる「清輔本古今和歌集」の古写本です。残念ながら、上冊は失われて、残っているのは巻一一から巻二〇

までの下冊のみ。また二か所の落丁により五首と六首、あわせて二一首の歌が欠落しています。清輔は歌道宗匠家、六条

藤家の総帥でした。家の証本(依拠すべき確かなテキスト)として、小野宮皇太后宮御本(紀貫之自筆本)のテキストを

伝える藤原通宗自筆本を書写したのが清輔本でした。清輔は何度か『古今和歌集』を書写していますが、山本家に伝え

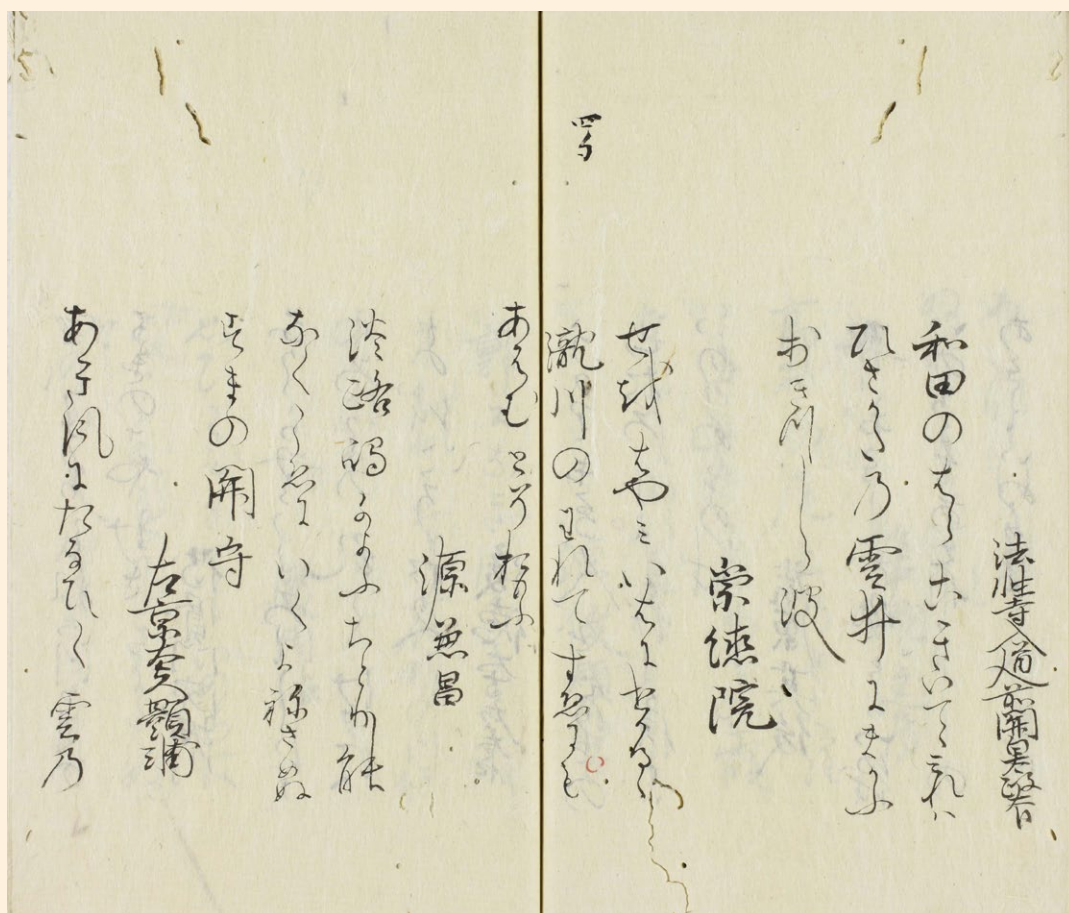
られた本は珍しい片仮名書きです。文化八年(一八一二)、柿本人麻呂・山部赤



紙背

人をまつる歌仙堂かせんどうの落成らくせいをはたした季鷹ひとたかに、祝いの品として海部屋善かいふやぜんじ二どうき(道幾)から贈られたものです。天保二年(一八三二)八月には、榎本寛親えのもとひろちかが虫損ちゅうそんの穴や紙背しはい文書の裏写り(薄墨を用いて再現)に至るまで、忠実に写し取った精巧な写本を製作しました(現在、静嘉堂文庫蔵)。その寛親本には「清輔朝臣の真跡にして洛の鴨の季鷹翁の珍藏也」「実に千歳ざいの珍宝といふべきものなり」と紹介されており、往事の昂奮こうふんが伝わってきます。最近まで、清輔の自筆とされてきましたが、紙背文書の情報などから、鎌倉時代中期の書写で、清輔自筆本ではないことが明らかとなりました(藤本孝一『賀茂季鷹所蔵本古今和歌集下・紙背文影印』日本史料研究会研究叢書一六、日本史料研究会、二〇一四年)。本文の上部と下部の、墨筆と朱筆による多くの書き入れは、これこそ清輔本の特徴です。

(小林)



1-2

「為家卿真蹟写 百人一首」

百人一首の原典を求めて

百人一首の原型を作った藤原定家（一二六二～一二四二）の息子為家（一二九八～一二七五）が書き残した百人一首の本（現在は所在不明）を、江戸時代の国学者屋代弘賢（一七五八～一八四二）らが繰り返し透き写ししてきた本の一つです。百人一首の定家自筆本は存在しませんので、為家の書いた本を最重要資料として、学者達が鼻息荒く、こぞって写本を作ったのもうなずけます。

（大山）



1-3

烏帽子狩衣姿で描かれた季鷹

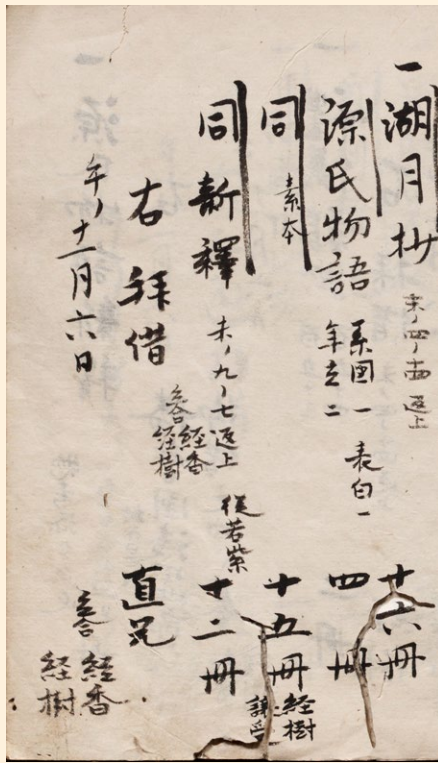
紀広成（一七七七～一八三九）（山脇東暉）の描いた季鷹の肖像画「季鷹県主肖像 正本」を模写した画です。季鷹は地下身分でしたが、五二歳の時に正四位下という高い位に昇りました。烏帽子狩衣姿で描かれています。広成は、松村月溪に入門して四条派の画風を学んだ京都の絵師で、人物画や花鳥画を得意としました。正本には肖像の上部に、季鷹が吉野の桜と紅葉を詠んだ自筆の和歌色紙二枚が貼られています。模本にはありません。（盛田）

1・3 季鷹肖像（模本）

1・4 歌仙堂書籍出納録

上賀茂の私設図書館

季鷹は、借書者が自筆で出納録に書名、冊数、借りる日付け、氏名を記載するか、または別紙証文に記載して、それと引き換えに本を借りるシステムで蔵書を貸し出しました。貸し出し期限は二ヶ月。出納の際には、上賀茂神社祠官の松田直兄、三宅経香、賀茂経樹、真聴、慈範の内、二人が立ち合うのがルールでした。115「帚木」の箱に収められている『湖月抄』一六冊を直兄が借用・返却しているように、季鷹の蔵書は社会に向けて開かれていたのです。（盛田）

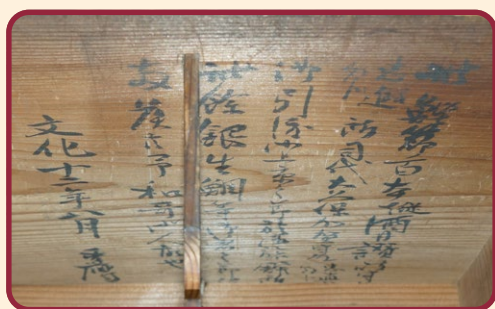


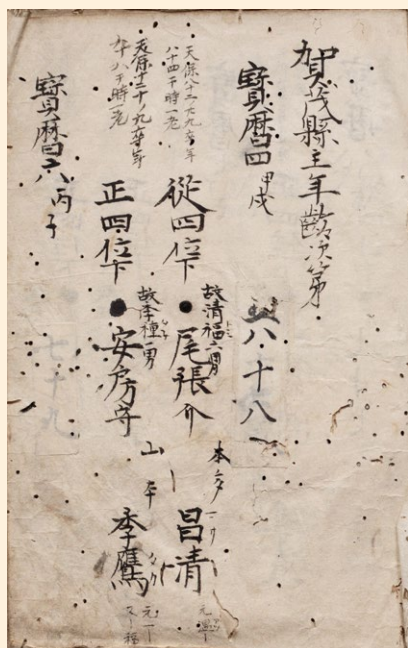
1-4

1・5 歌仙堂文庫の蔵書箱

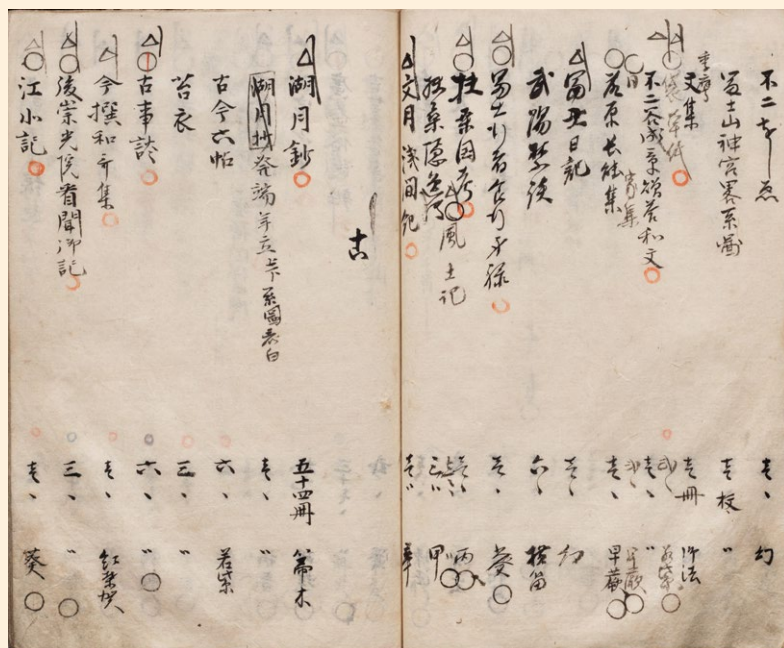
季鷹の「知」の宝庫

右は蔵書箱「帚木」です。蓋表に「湖月抄」と墨書されており、季鷹が江戸遊学中に購入した『湖月抄』五四冊が入っていました。季鷹はこの『湖月抄』を手控え本として、加藤千蔭邸で妻の本子の要望により天明六～九年（一七八六～一七八九）に『源氏物語』の講釈を行いました。左の蔵書箱の中には、文化二年（一八一五）に和歌門人の老中酒井讃岐守忠進、京都所司代大久保加賀守忠真から鯉節一〇〇本や銀や生鯛を贈られたことが自筆で記されており、季鷹六二歳以降に造られた本箱です。（盛田）





1-7



1-6

1-6 歌仙堂書籍目録

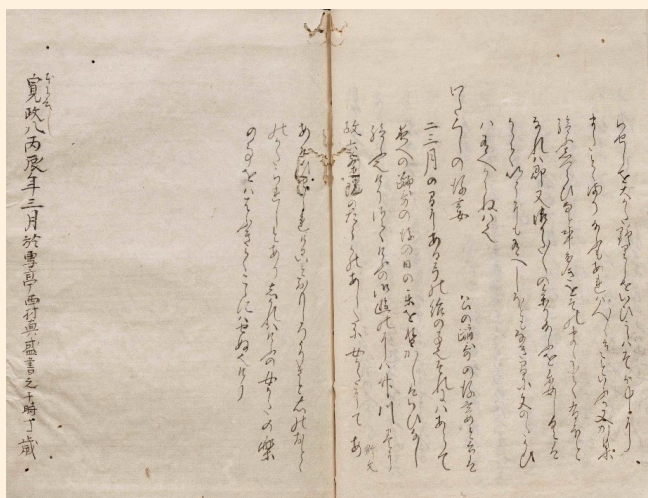
生涯をかけて蒐集した蔵書

季鷹は上賀茂の別荘「雲錦亭」に文庫を建て、生涯をかけて「和漢の書籍数千巻」と称された貴重な本を蒐集しました。入手した本は、源氏物語の巻名・十干を付した箱に収め、出納できるように『歌仙堂書籍目録』（書名の「いろは」順に、書名と冊数、収納した箱名を記載）を作成しました。本資料中央の『湖月抄』五四冊は1-5「帚木」の箱に収納されていたことがわかります。季鷹没後も大切に整理・保管されました。（盛田）

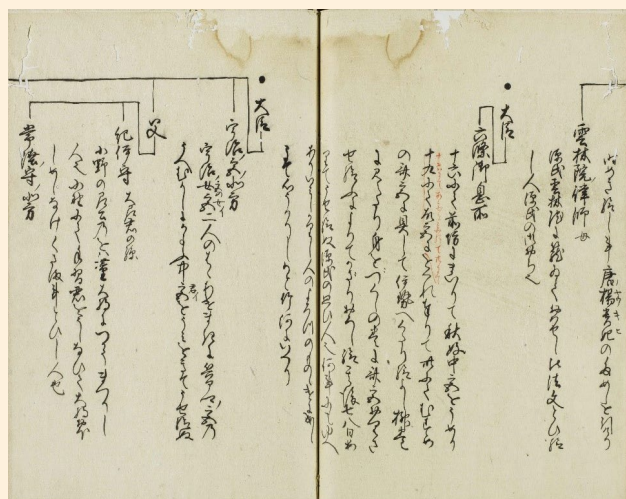
1-7 賀茂県主年齢次第

賀茂県主一族の長老として

賀茂県主の人々を生まれた年ごとに分けて、亡くなった年月日と年齢、位、父親との関係、職名、本姓、名の順に記載した名簿です。宝暦四年（一七五四）生まれで、天保十二年（一八四一）一〇月九日に八八歳で亡くなった季鷹は、「時の一老」（賀茂一族中の長老で社会的にも立派な業績を挙げた人の尊称）と記されて尊敬されていました。季鷹の長男で、季鷹の前には一季、季福と名乗ったことが知られます。位は正四位下まで昇り、安房守に任ぜられました。（盛田）



1-8



1-9

1-8 源氏物語

古典をめぐる活発な知的交流

『源氏物語』の注釈書である『源氏物語別記』および『源氏物語新釈』（賀茂真淵著、宝暦八年（一七五八）成立）の写本です。四五冊。桐壺巻／竹河巻存。本文の不審な点に対し、季鷹が朱筆・貼紙などで訂正を入れています。初音巻は一一歳の「西村真盛」なる人物（父は村田春海門弟の西村嘉卿か）が寛政八年（一七九六）に書写した本を元にしており、真淵一門の人々と季鷹の交流のさまがうかがえます。

（中西）

1-9 源氏物語系図

誰が誰だか分きたい！

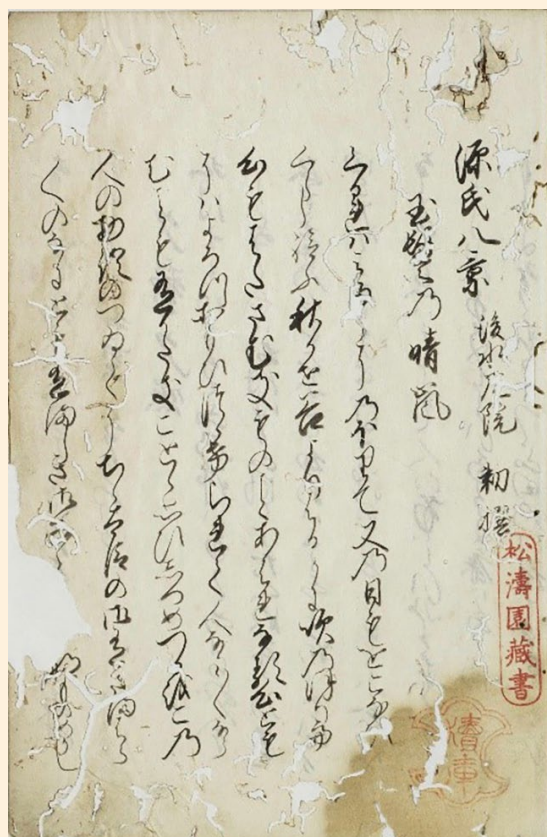
老若男女が入り乱れる『源氏物語』の作中人物たち。彼らを皇統や家系によつて整理し、少しでもすっきりと把握しようとする系図化の試みは、物語成立後の早い時期から行われ、幾度となく修正が繰り返されてきました。本系図は『湖月抄』（北村季吟著、延宝元年（一六七三）成立）に収載された「天文本古系図」を、字配りまでそっくりに書写したものです。六条御息所の経歴などに、季鷹による修正の跡が残ります。

（中西）

1・10 源氏八景 げん じ はっ けい

物語的名所といえど？

「八景」は、中国の伝統的な画題である「瀟湘八景」にならい、八つの景勝を選定したものです。近江八景、金沢八景などでなじみのある方も多いでしょう。これに影響を受けて、虚構の作品である『源氏物語』からも「玉鬘乃晴嵐」(長谷寺の玉鬘一行に吹きつける嵐)など八つの名場面が選ばれ、物語本文の抜書と共に親しまれました。季鷹所蔵本は内題の下、および題簽に「後水尾院初撰」「後水尾」と明記されていることが注目されます。「源氏八景」の撰定者について新たな手がかりを示している点で、研究上も貴重な一本です。(中西)



生山書庫

たふくろ明集

をんる

とあはれもの浦に舟のりてくそ人恋り我やわたり

あふのりてふりてふりて

ぬえ舟のりてふりてふりてふりてふりてふりてふりて

小町の中あたふりてふりてふりてふりてふりてふりて

けいりてふりてふりてふりてふりてふりてふりてふりて

あふ

1-11-1

清堂関白集

三位中将春乃使へおほはれとて

たふくろのりてふりてふりてふりてふりてふりてふりて

あふ

あふつてふりてふりてふりてふりてふりてふりてふりて

あふ

あふつてふりてふりてふりてふりてふりてふりてふりて

あふ

あふつてふりてふりてふりてふりてふりてふりてふりて

1-11-2

1. 11. 1 左大臣高明集 さ だい じん たか あきら しゅう

1. 11. 2 御堂関白集 み どう かん ぱく しゅう

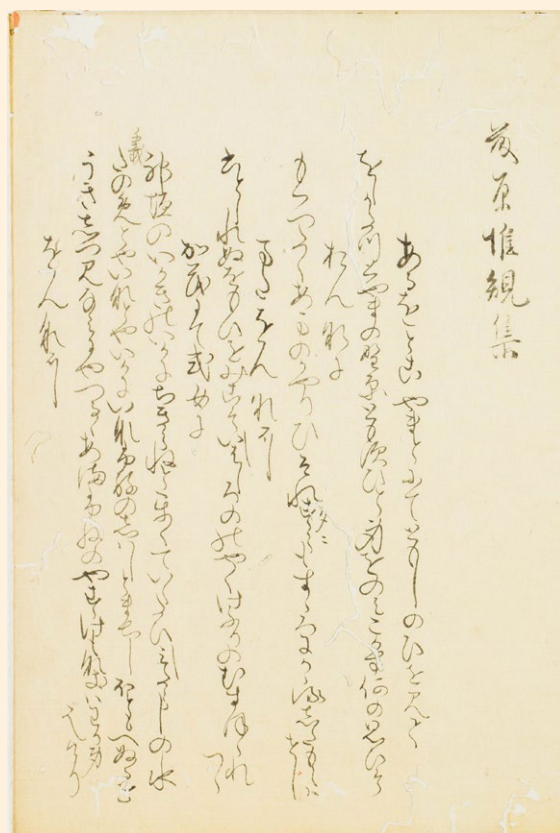
〈光る君〉の周辺

『左大臣高明集』は醍醐天皇の一世源氏、源高明(九一四〜九八二)の家集。その不遇な運命から光源氏のモデルの一人とも言われています。

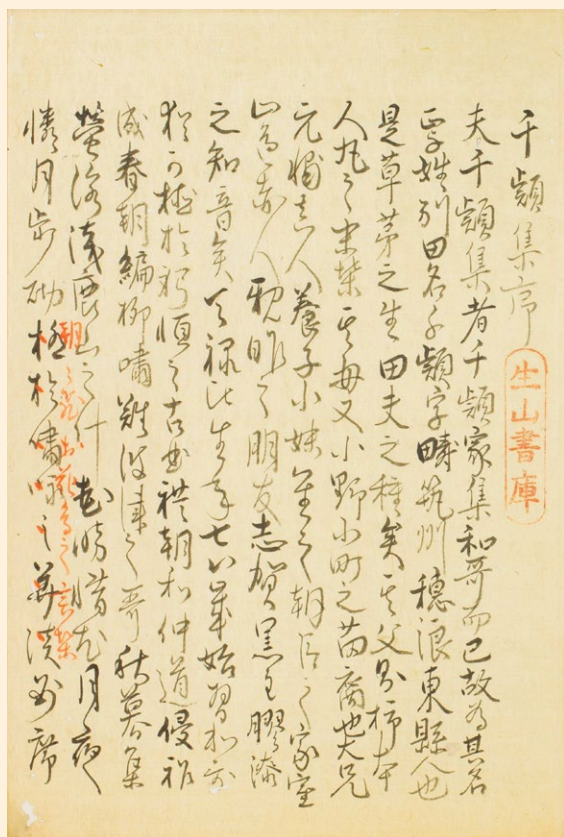
合綴された『御堂関白集』には、藤原道長(九六六〜一〇二七)および正妻の倫子、その母の穆子、娘の彰子や妍子、息子の頼通といった家族間のプライベートルな和歌の贈答が収められています。

『源氏物語』の創作を後押しした一家の素顔が垣間見える興味深い家集です。いずれも寛政七年(一七九五)に季鷹が校合を終えたことが記されています。

(中西)



1-12-1



1-12-2

紫式部の兄弟と 創作上の人物「千穎」

『惟規集』は紫式部の同母兄弟(弟か)のぶのりしゅう
 藤原惟規(生没年未詳)の家集です。『紫

式部日記』によれば、幼少時、漢学の才では紫式部に負けていたようですが、のちに風流をうたわれた賀茂斎院の女房と交際し、恋の歌を多く残しました。本書は寛政七年（一七九五）六月九日に「猪苗代氏本」と校合した旨が末尾に記されています。

合綴がってつされた『千穎集』は「別田千穎」わけどちかいなる虚構の人物に仮託された家集である。「千穎」は「多くの稲穂」の意。一世紀頃の成立ですが、謎が多く残ります。

(中西)

$\frac{1}{12} \times \frac{1}{2}$
 $\frac{1}{12} \times 1$
 千穎集
 惟規集

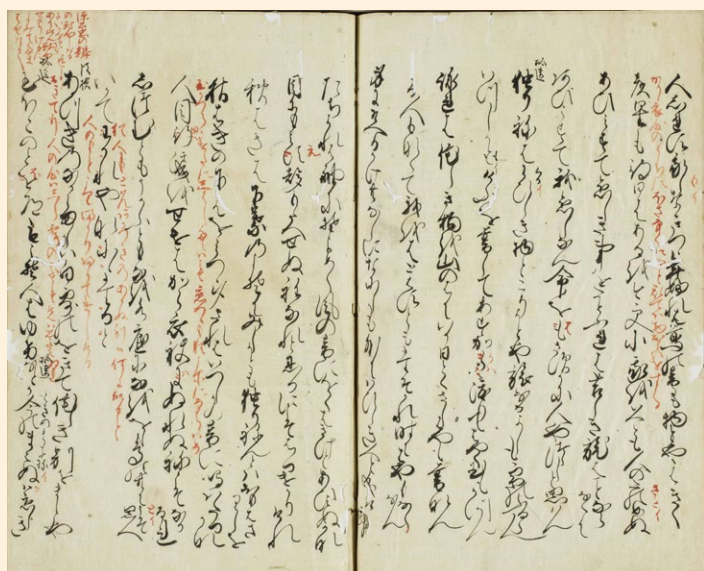
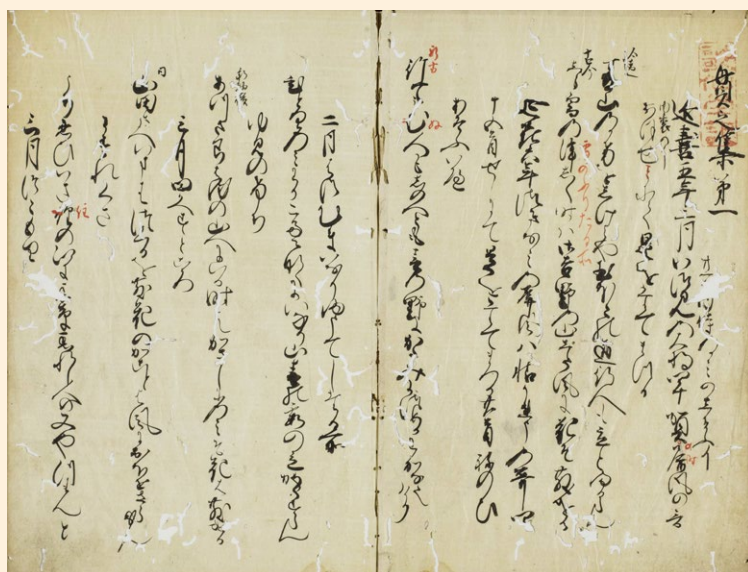
1.13 貫之集 つら ゆき しゅう

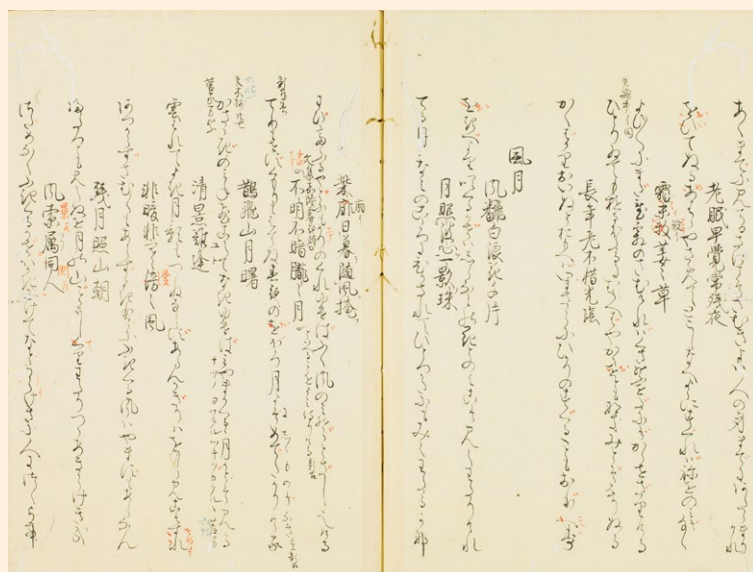
自分だけの無二のテキスト

平安朝の優れた歌人であり、最初の勅撰和歌集『古今集』ここんしゅうの撰者でもあった紀貫之きのつらゆき。その和歌を集成した『貫之集』は平安時代以降愛読され、近世の国学者にとつては重要な研究資料でもありました。

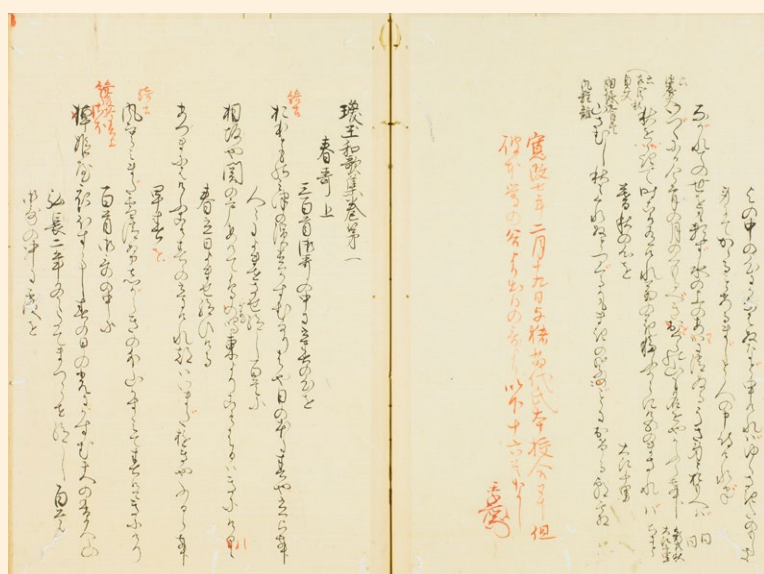
この『貫之集』は写本で、季鷹すえたかは古典研究の成果を元に誤字の修正等の書き入れをふんだんに行っています。本を書き写し、書き入れを加えることで、自分だけのテキストが出来上がっていくことには、研究面に限らない充実感があつたことでしょう。

(大山)





1-14-1

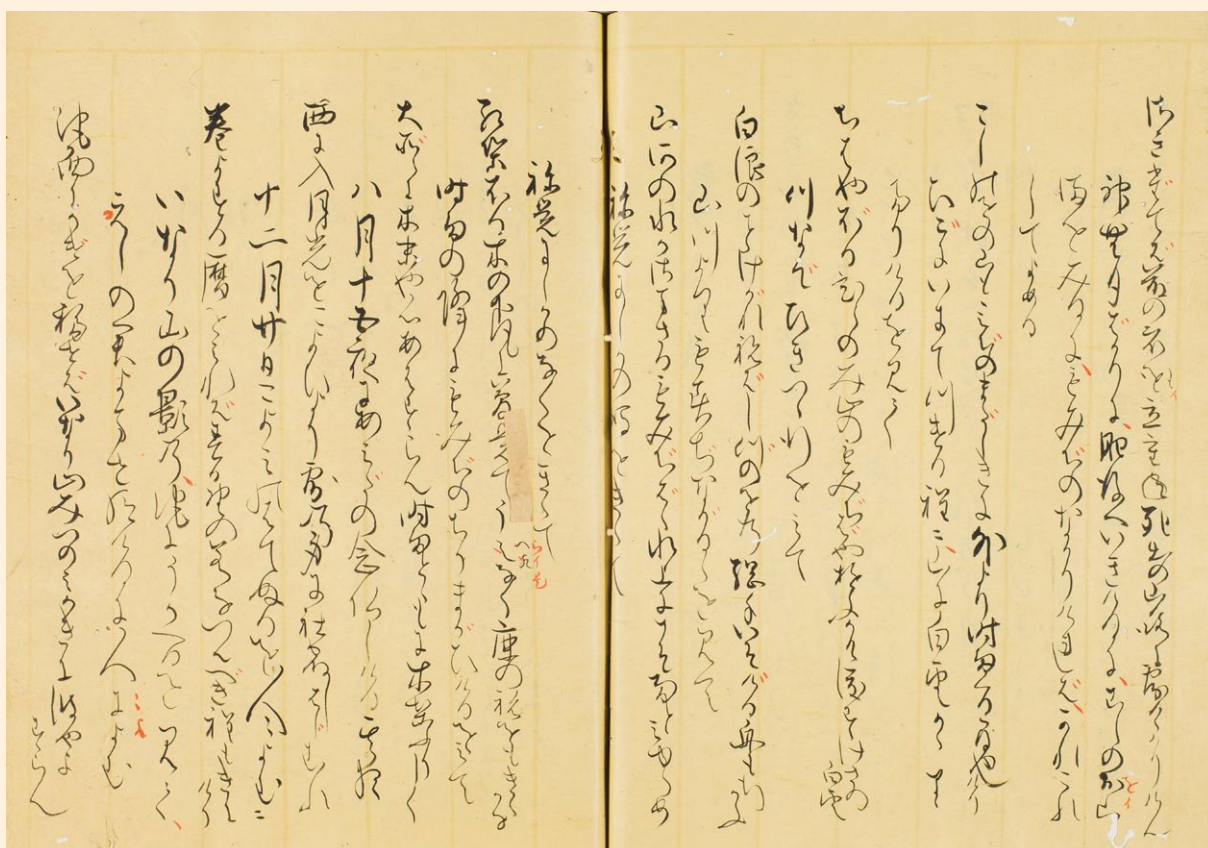


1-14-2

1、14、1 おお えの ち さと しゅう
大江千里集
1、14、2 けい ぎよく わ か しゅう
瓊玉和歌集

本の親子、本の兄弟

平安時代前期の大江千里および鎌倉時代中期の宗尊親王の家集を一冊に綴じ合わせたものです。時代が異なり、近い血縁関係にあるわけでもないこのふたりの家集がなぜ合綴されているのかは判然としません。同様の取り合わせの本は、上賀茂の三手文庫や山口県立山口図書館にもあります。山口図書館の本は萩藩校明倫館の旧蔵書で、本資料とともに、三手文庫の本を親本として転写したものです。つまり、本資料からすると、三手文庫本が「親」に、山口図書館本が「兄」に当たります。(宮武)



1.15 安法法師集

貼紙をめくると、

二種類の朱の書き入れが：

安法法師（生没年未詳、一〇世紀後半

に活躍）の家集。季鷹の蔵書ではめずら

しい、列帖装大和綴（紙を重ねて穴を開

け紙縫りや糸で綴じる）の本です。縦書

き便箋の野線に見えるのは「界線」で、

空押しにより描かれています。他本との

異同、また濁点・読点などを朱筆で書

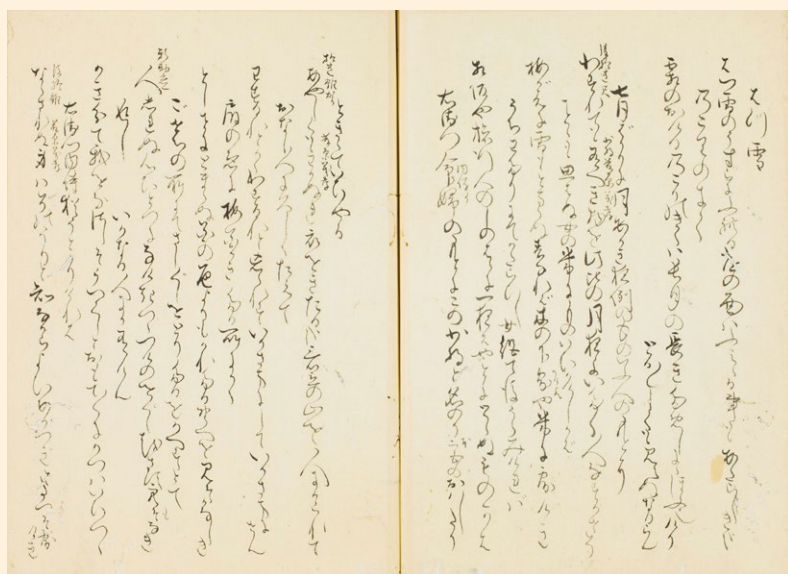
き入れているほか、下の文字が読み取れ

るように貼紙がめくれるように糊付け

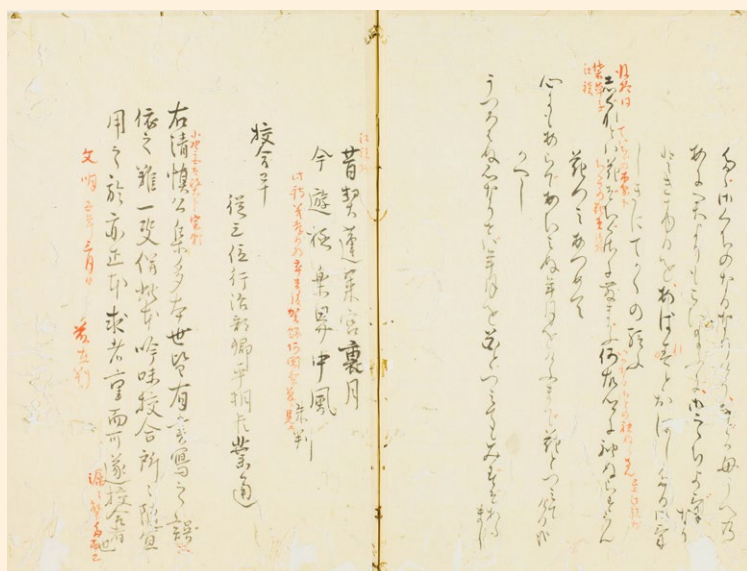
されています。見返し（表紙の裏）には

『古今和歌集』の「仮名序」が写されてい

ます。（小林）



1-16



1-17

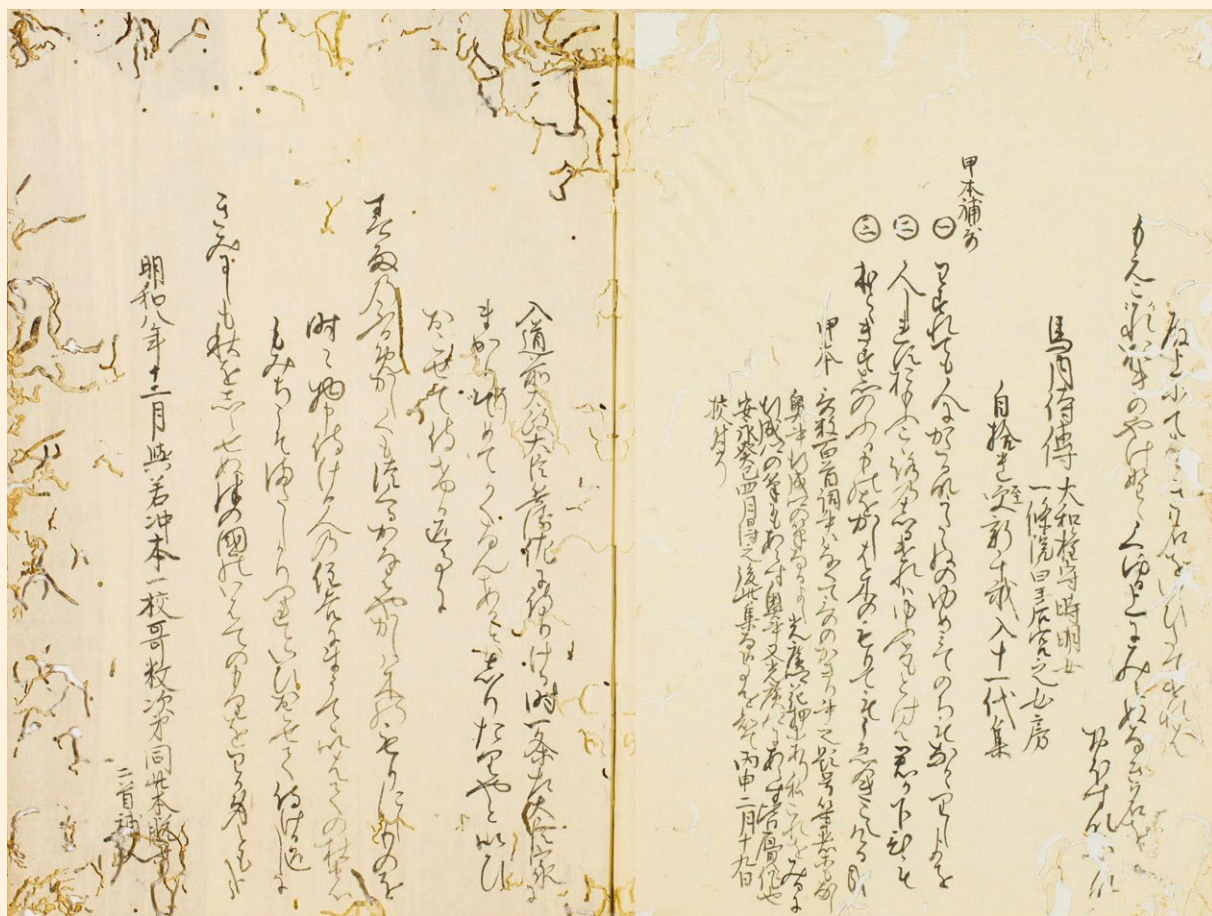
1-16 清慎公集 せいしんこうしゅう

1-17 清慎公集

その考証、おそるべし

ふじわらのさねより
藤原実頼(九〇〇〜九七〇)の家集

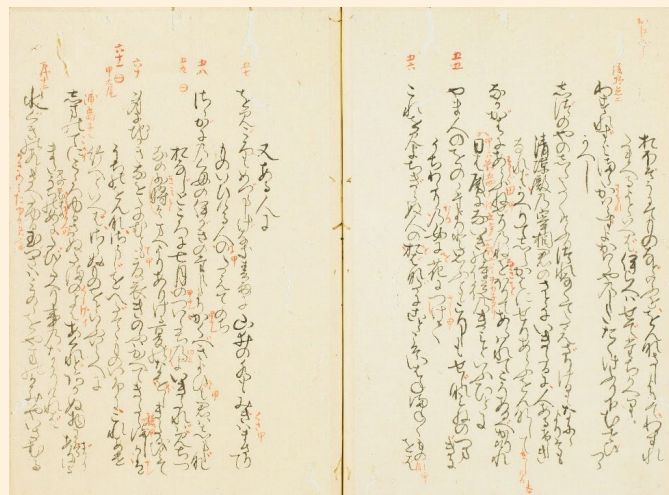
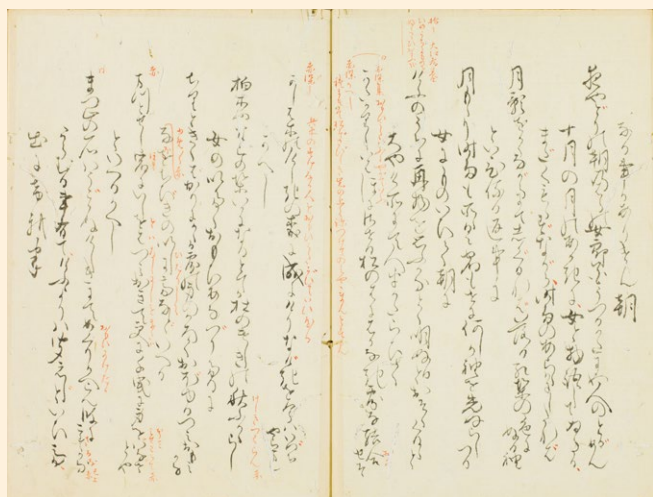
『清慎公集』は、すべて同一系統です。季鷹の蔵書には珍しく、よく似た本が二本も伝わっているのは、なぜでしょう。複数の本を比較して疑問を解決したかったから、と思えてなりません。実は『清慎公集』の後半六一首は『藤原義孝集』からの、さらにその直前四首も『伊勢大輔集』からの混入でした。現代の研究者たちが次々と学説を発表し、明らかにになりました。けれども当部分の和歌には、すでに季鷹の手で逐二ちくいち「藤原義孝」「伊勢大輔」と書き付けられていたのでした。季鷹、おそるべし。(小林)



1・18 馬内侍集 うまの ない し しゅう

あぶり出される 未知のテキスト

馬内侍^{うまの ない し}（生没年未詳）の家集。季鷹^{すえたか}は手元の『馬内侍集』に、披見^{ひ けん}し得た「甲本」との異同を「甲本此歌無^{このうたなし}」などと書き入れました。歌数一〇〇首で詞書^{ことばがき}（詠作事情）はなく歌のみ、題名もなく筆者の記載もない「甲本」には、藤原行成^{ゆきなり}筆と鑑定した江戸時代前期の公家烏丸光広^{からまる みつひろ}の花押などがあつたようですが、季鷹^{みながんさく}は「皆贋作^{みながんさく}」と斬って捨てています。『馬内侍集』には水野本^{みずの}という歌数五五首、古態を伝える江戸時代の写本が伝存し、やはり詞書がありません。贋作でも、行成筆を名乗るからには、それなりの古い写本であつたと考えられます。季鷹の書き入れから、未知のテキストを復元できる可能性が出てきたのです。（小林）



1-19

1-20

数多くの伝承を残した歌人

藤原実方は一〇世紀の歌人です。藤原行成との争いが原因で、「歌枕見て参れ」と陸奥守に任じられたという伝説をはじめ、多くの逸話が残されています。『実方集』には、『枕草子』の作者、清少納言と深い仲であったことを思わせる贈答歌も収められています。上賀茂ともゆかりの深い人物で、『徒然草』には、実方は上賀茂神社の一社である橋本社はしほんじの祭神であると書かれています。

(渡辺)

1-19
実方集
さね かた しゅう

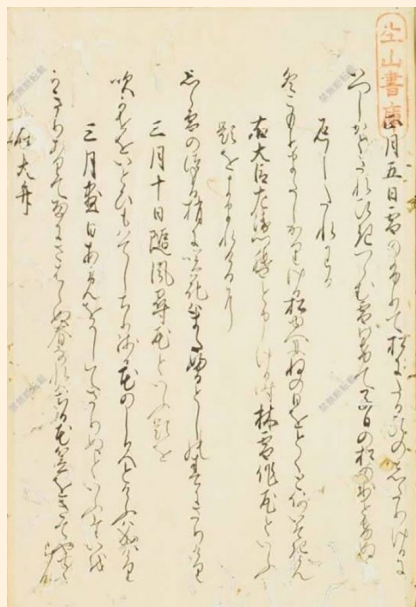
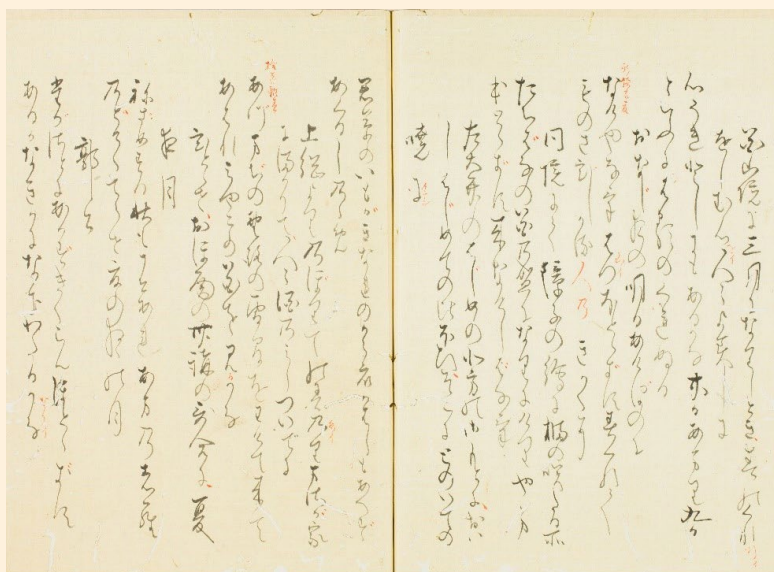
1-20
匡衡集
まさ ひら しゅう

妻の家集とも校合

大江匡衡おおえのまさひら(九五二―一〇二二)の家集です。大江氏は菅原氏と併称される学問の家でした。1-14で取り上げた千里は、匡衡の祖父である維時の伯父おじ。匡衡の妻の赤染衛門は、藤原道長の正妻である倫子に仕えた女房で、紫式部の同僚でした。中央部分には朱で「赤染集」とあり、『赤染衛門集』と校合したことが知られます。文章博士を務めた匡衡は、漢詩文集『江吏部集』も残しています。

(宮武)

1-21



1-22

歌道に身を捧げた余りに…

藤原長能は平安中期に活躍した歌人で、『蜻蛉日記』の作者、藤原道綱母の兄弟です。『長能集』には「心うき……」で始まる、三月が二十九日で終わり、春の短さを嘆く歌も収められます。この歌を藤原公任に「春は三十日やはある」(春は三月の一ヶ月間だけでなく、もっと長い)と批判され、長能は衝撃の余り病死したと言われます。長能が真摯に和歌へ取り組んでいたことがよくわかる伝承です。

(渡辺)

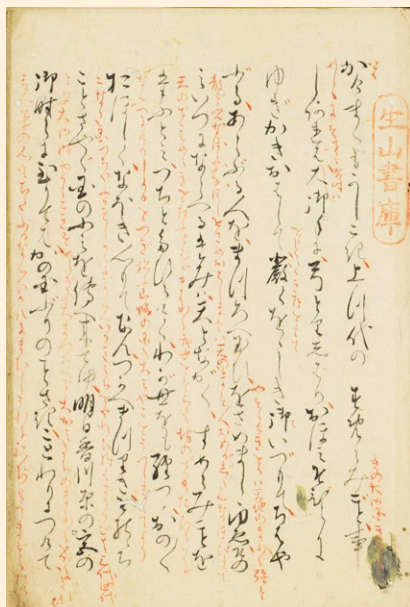
1・21 藤原長能集

1・22 定頼卿集

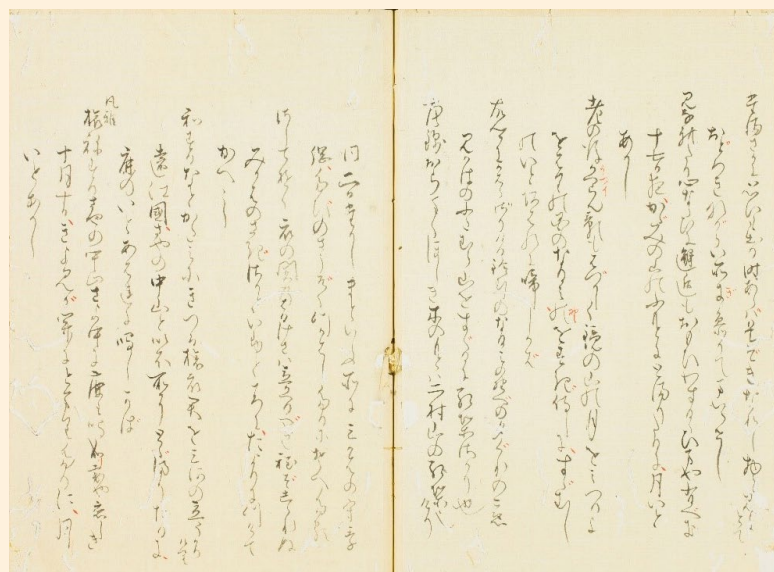
小式部内侍をからかった百人一首歌人

藤原定頼の家集には藤原定家が書き写して広まった定家本系統と明王院旧蔵本系統の二種類があります。定家本系統である本資料は、明王院本より収載歌の数が少なく、「百人一首」に選ばれた「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれたる瀬々の綱代木」も入っていません。定頼は「お母さんに和歌の代作を頼みましたか」と小式部内侍をからかって、「大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立」の名歌が詠まれるきっかけを作ったことでも有名です。

(雲岡)



1-24



1-23

風流な逸話を伝える受領歌人

橘為仲は二世紀の歌人で、同時代に活躍した和歌六人党の一人に数えられることもあります。承保三年(一〇七六)からの陸奥下向の際には、村上源氏の祖である源師房から、たまにでも自分のことを思い出してほしいと、愛用の衣を送られました。陸奥での任期を終え帰京する際にたくさんのお萩を持って帰り、京の人々が大勢見物にやってきたという、風流な逸話も残っています。

(渡辺)

1・23 橘為仲朝臣集

1・24 金槐和歌集

先人の評語を書込み、 さらにまた書き入れ、学ぶ

賀茂真淵(二六九七～一七六九)は、源実朝(一一九二～一二一九)の万葉調の和歌を高く評価していました。実朝の家集『金槐和歌集』の版本に真淵が評を書込んだ『評語本』の転写本や、版本の所有者が真淵の序言や評を転記した本も多く伝わっています。季鷹も手元の版本に真淵の宝暦五年評の序言を書写していました。さらに食欲に、宝暦一〇年評異文との異同を行間に朱で書き入れています。

(小林)

【コラム A】

古今和歌集

一〇世紀の初頭に成立した『古今和歌集』は、「やまとうたは人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」（仮名序）と高らかに謳いあげ、開巻します。「やまとうた（和歌）」とは「からうた（漢詩）」を意識した表現、「よろづの言の葉」とは『万葉集』を意味します。先行する『万葉集』を踏まえながら、しかし『古今和歌集』の最大の特徴は、季節のうつろいを第一とし、四季折々の美しさを前面に押し出したことでした。西洋のように時間は一方向に流れるだけでなく、時はめぐり、循環するものであるという価値観です。自然と共存し、循環型の社会をめざす暮らし方のルーツは、この頃には、はつきりと意識されていたと見るべきでしょう。

満開の桜を雲に、散る桜を雪に、紅葉を錦と感じとる「見立て」や、梅に鶯、月に雁などの「取り合わせ」など、現代では常識となっている美意識も、『古今和歌集』によって完成されました。

た。その影響は謡曲の詞章や歌舞伎の台詞、また落語にも及び、草も木も鳥も虫も『古今和歌集』に登場するものが一流とされ、西陣の帯の柄、蒔絵など工芸品の図案、さらに京料理の盛りつけ、京菓子の銘に至るまで、日本人の生活様式のほぼすべてにわたり浸透しています。

「仮名序」では、和歌は素戔嗚尊にはじまると明記されていました。日本には神々の託宣歌も数多く伝わっていますが、和歌は神仏と交感できる不思議な力をもつという信仰があったのです。『古今和歌集』二〇巻は「賀茂の冬の祭の歌」で閉じられていました。高名な歌人であった季鷹は、上賀茂神社に奉仕する社家の人でもありました。彼が『古今和歌集』を深く尊崇していたことは、吉野の桜・竜田の紅葉を移し植えて営んだ別荘の雲錦亭、そこに祀られた歌仙堂などの遺構からも、しのばれるのです。

（小林・宮武）

【コラム B】

源氏物語の世界

季鷹は後年、故郷である上賀茂神社の杜家町しやけまちに文庫を建て、自らが蒐集した膨大な蔵書を収めていました。それぞれの本は『源氏物語』の巻名を付した箱（1―5『歌仙堂文庫の蔵書箱』）に分類され、人に貸し与える際なども厳密に管理されていました（1―4『歌仙堂書籍出納録』）。ここから、季鷹の本を大切にする心、とりわけ『源氏物語』をはじめとする王朝の文学に対する親愛の念が伝わってくるわけですが、そうした思いは、青年期から壮年期にかけての江戸滞在の経験と深いつながりを持っていたように感じられます。

江戸に住んだ約二〇年間に、季鷹は数回にわたり『源氏物語』の講釈を行っています。主な受講生は著名な和学者・歌人であった加藤千蔭かとうちかげの妻とその女友達、また季鷹の親しい知人・門人などでした。講釈のペースは速く、およそ一年強で五四帖を読み切った回もあるようです。読

了時には記念の宴をひらき、受講生たちが物語の印象的な場面をふまえた和歌を詠みました。驚くべきは彼らの縦横無尽な場面選択と深い物語理解のさまで、季鷹の講釈がいかに行き届いたものであったかが想像されます。

この古典的教養にあふれた文化人サークルは、吉原の人々とも交流があり、安永八年（二七七九）には『源氏物語』の趣向を用いた『角田川扇合』たがわあきあわせ（扇と歌の制作の趣向を競う催し）が、『伊勢物語』にちなんだ隅田川のはとりで優雅に行われました。

こうした贅沢な催しは、堂上どうじやうにおいては歌合うたあわせ自体が禁止されていたという、当時の京都では望むべくもなかったことでした。身分や性別の規制を超えて古典の楽しみを謳歌おうか・共有しよう、という江戸の地の自由闊達な気風に、若き日の季鷹は大いに刺激を受けたことでしょう。

（中西）

【コラム C】

テキストと書き入れ

文学作品を読み味わう、そのためにはまず信頼できるテキストを手に入れたい。誰もがそう望むはずです。日本の古典作品は、印刷技術のない時代から、人の手で書き写されることを繰り返して、流布してきました。どうしても書き誤りは起こりますし、糊が剥がれて、また糸が切れて脱落する部分があったり、綴じ直すときに錯簡が生じたりもします。

多くの古典作品がそうであるように、『源氏物語』も紫式部の自筆原本は失われてしまい、残念ながら伝存していません。では、どうするか。いくつかの転写本を比較することで、本来のテキストを復元したい、少しでも近づきたい。他の本と比較して、手元の本に異同を書き入れる「校合」は、いわば自然に発生した行為だったといえるでしょう。

西行法師の家集『山家集』には、松屋本という重要な写本がありました。現在、所在が不明で

すが、幸いなことに、版本『六家集』の「山家集」に書き入れられた本文異同のおかげで、松屋本のテキストを復元することができ、研究が進んでいます。

季鷹は神職であり、歌人であり、他本との校合・書き入りを徹底して行った古典学者でもありました。『馬内侍集』の書き入れからは、現在知られていない幻の古写本の姿が浮上してきますし、『清慎公集』には、現代の研究者がたどりついた成果を、すでに江戸時代に発見していた形跡が見て取れるほどです。季鷹の蔵書には、テキストの異同だけにとどまらず、人物の伝記や語句の解釈など、さまざまな情報が書き入れられています。国文学研究資料館の「国書データベース」【<https://kokusho.nijl.ac.jp/>】で画像を活用すれば、書き入れから新しい発見がきっとあるはずです。

(小林)

第二部

季鷹の文芸活動

紅沉香

惣長三尺四寸

重目

四貫七百五十目

但小切共

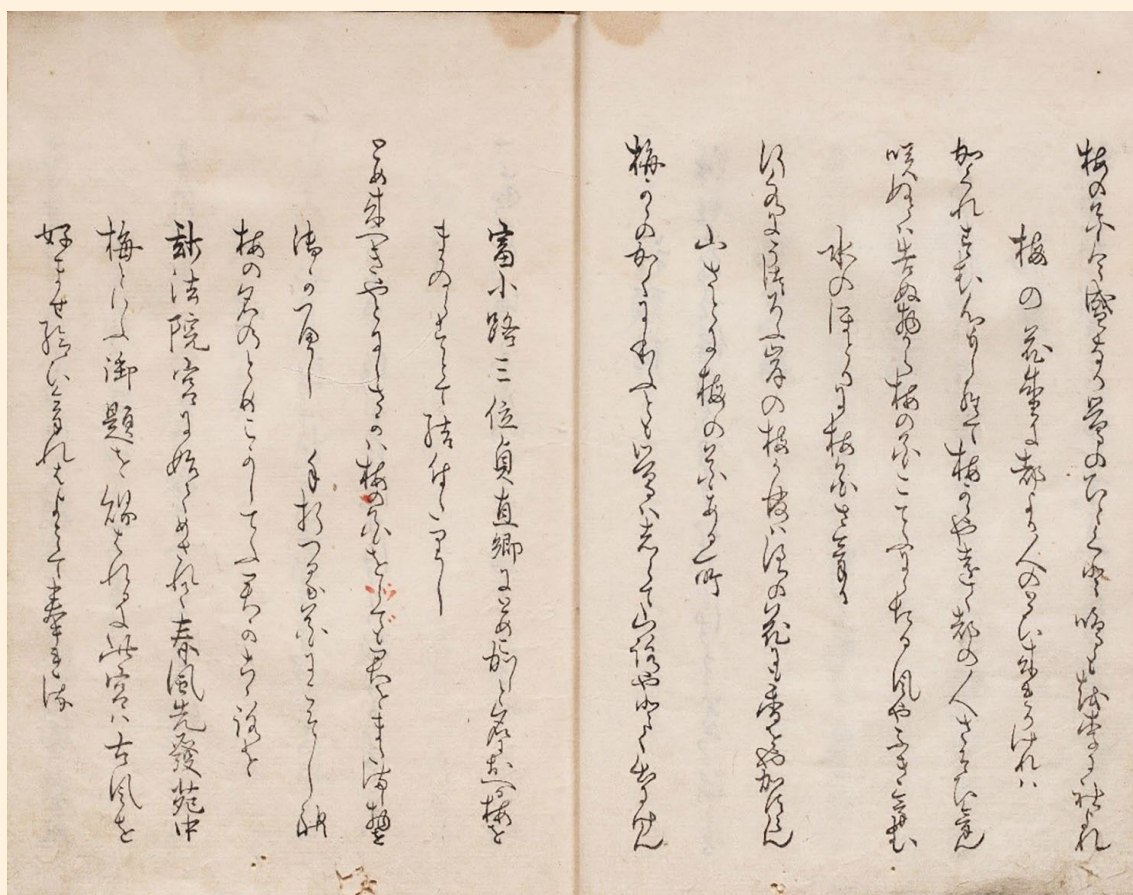
信長切口

九寸五分

季鷹が家督を継いだ山本家の当主は、代々上賀茂神社に仕えると同時に、有栖川宮家の諸大夫としても仕えてきた。例えば、季鷹の祖父の廉顕は、諸大夫としてお仕えしていた有栖川宮職仁親王が、公卿で歌人の烏丸光栄から古今伝受を相伝されるのに先立って、親王の代参として、住吉・玉津島両社に参詣し、季鷹の父の季栄は、神社の雑掌として江戸城に登城し、帝鑑之間で將軍に御目見、檜之間で時服を頂戴しています。このように、山本家の当主は京都と諸国を往来しながら、子孫のために記録や日記を残してきました。

そのような先祖代々の蔵書を引き継ぐと同時に、季鷹も諸国を往来しながら、著名な蔵書家との書物交流もしくは本屋を通して、神道や有職故実、古典学、歌道、筆道などの稀覯本を購入したり、書写したり、あるいは贈与されるなどして蔵書を増やしてゆきます。当時、上賀茂神社の摂社であった貴船神社に定期的に宿直した季鷹は、その夜の時間にも和歌を詠み(2-1『雲錦翁家集』)、研究を進めました。『和字正濫鈔』(2-6)の奥書によれば、貴船神社での宿直中に、上賀茂神社の今井似閑校本と自分の本を比較しながら、本文の異同を確かめたり誤りを正したりして研究しています。文化一〇年(一八一三) 光格天皇が石清水臨時祭を再興する際には、儀式の時に用いる大中臣能宣朝臣の歌について問われますが、考証の上答えて感状をもらいました。季鷹の研究力と歌人としての力は、たゆまぬ努力によって培われたのです。

(盛田)



2・1 雲錦翁家集

華やかな季鷹の交遊録

天保二（三年）（一八三一—一八三二）頃に出版された季鷹の家集。初版初摺本。歌の門人たちから出版を懇願されてから約三〇年の時を経て出版され、その後も修正を書き入れました。近衛家、妙法院宮家、日野家といった堂上家の歌会に詠進していたことや、有栖川宮織仁親王、芝山持豊、富小路貞直などの堂上、水野忠邦などの武家、伴蒿蹊、小沢蘆庵、加藤千蔭、本居宣長といった地下など、江戸・京都・地方の歌人たちとの華やかな交遊がうかがわれます。

（盛田）

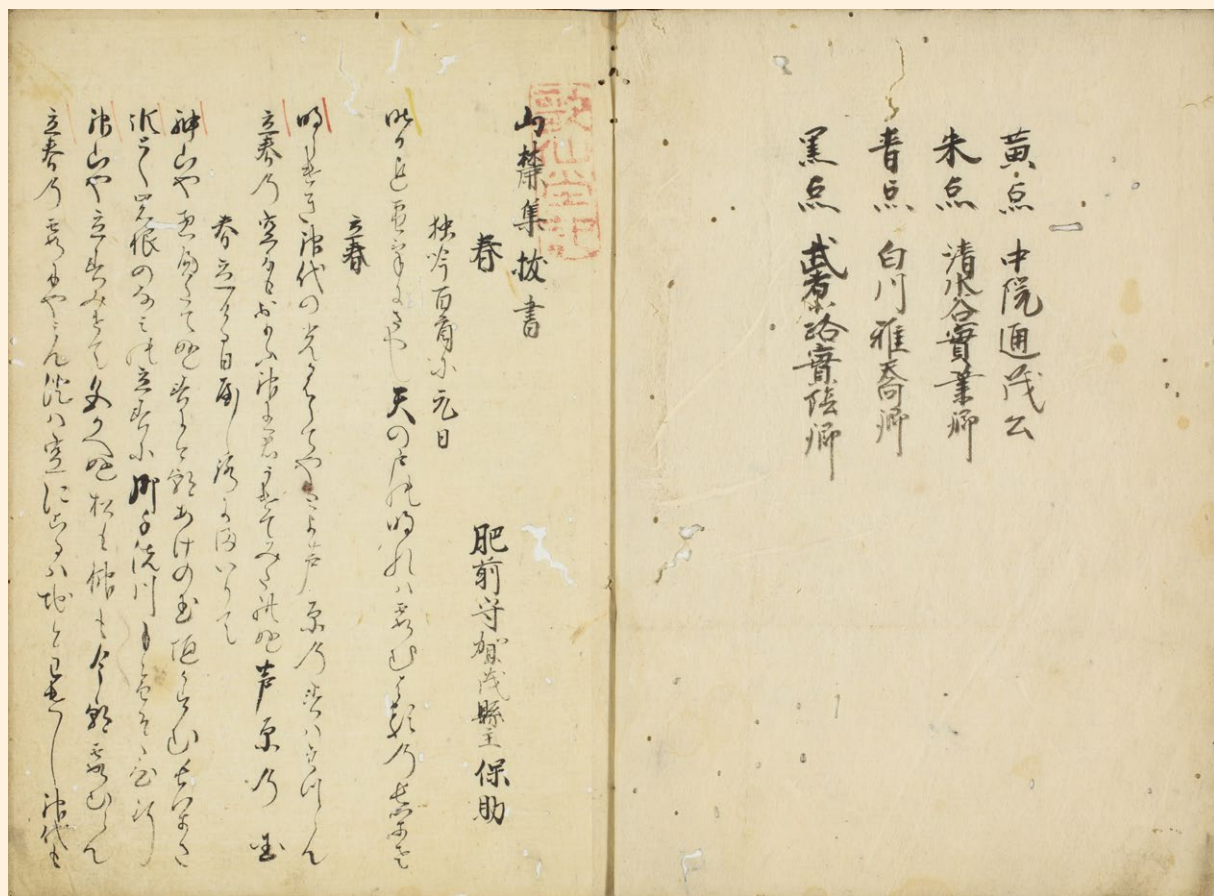
2・2

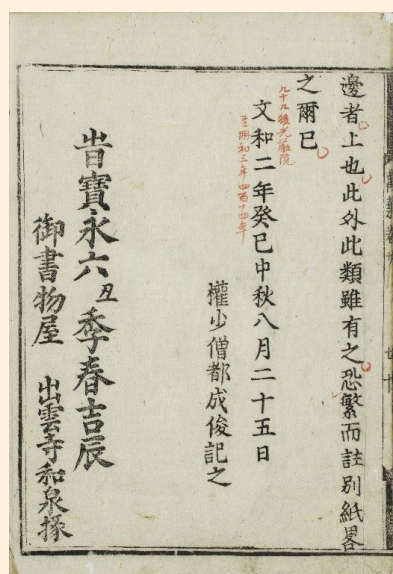
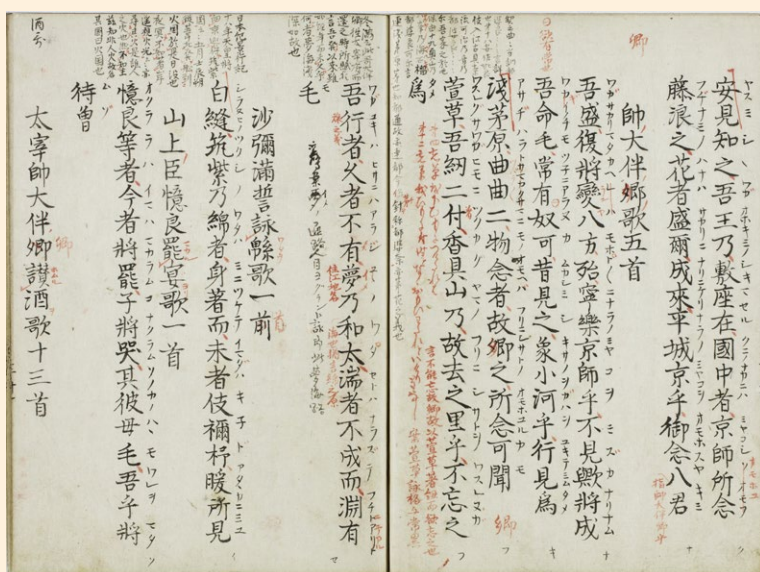
山麓集并
続山麓集拔書

先生のお墨付き！

賀茂保助(一六五二―一七二二)は神職・歌人。岡本氏。通称肥前守。本書は、伝本稀なる保助の家集です。四人の公家による加點があり(黄點は中院通茂、朱點は清水谷実業、青點は白川雅喬、黒點は武者小路実陰)、その歌道精進の一端が窺えて貴重です。

「元日」題の巻頭歌「昨日迄雪気にさへし天の戸の明れば霞むはるの長閑さ」はいかにも穏当な詠みぶりで、通茂の合點が付されています。(神作)

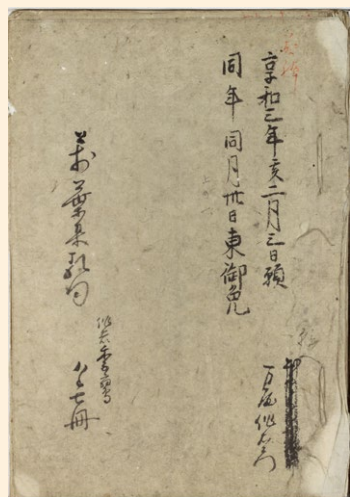
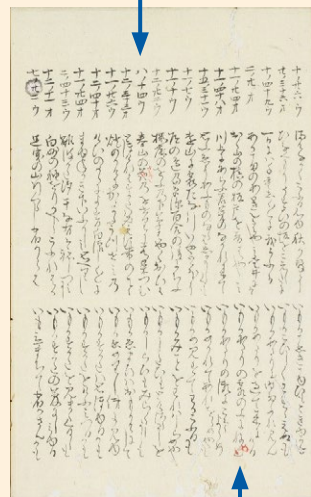
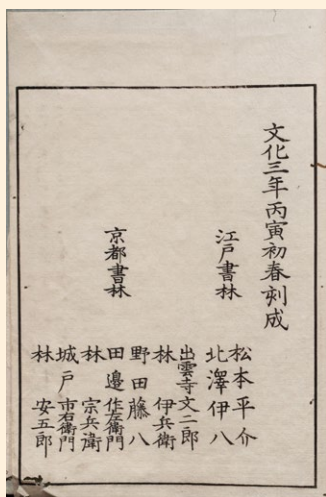




2・3 万葉和歌集

生涯にわたる『万葉集』研究

『万葉集』は天平宝字二年(七五九)以後に成立した日本で最も古い歌集で、皇族・貴族から庶民まで広い階層の人々の歌が集められ編集されています。季鷹は宝永六年(一七〇九)に出版された『万葉和歌集』(二〇冊)のうち一六冊を手に入れ、手に入らなかった四冊(巻二・四・五・六)は書写して、本文の余白に、契沖、下河辺長流、賀茂真淵、荷田御風、富士谷成章などや自分の説を朱、墨、青、紫で書き入れています。『万葉集』の学びは二三歳から晩年まで、数十年にわたって続けられました。(盛田)



2-4

2-5

『万葉集類句』の稿本

2・4

万葉集類句

『万葉集類句』の草稿は、荷田御風から校閲を受けて、江戸遊学中には出来ていましたが、京都への帰郷後に出版されました。本書の表紙に「享和三年亥二月三日願 同年同月三十日東御免 万屋作右衛門」と墨書されており、享和三年（一八〇三）に万屋から京都の本屋仲間に出版のための出願手続きがされたことがわかります。許可を得た『万葉集類句』は、文化三年（一八〇六）六月に出版されました。朱を入れた部分は刊本では直されています。

（盛田）

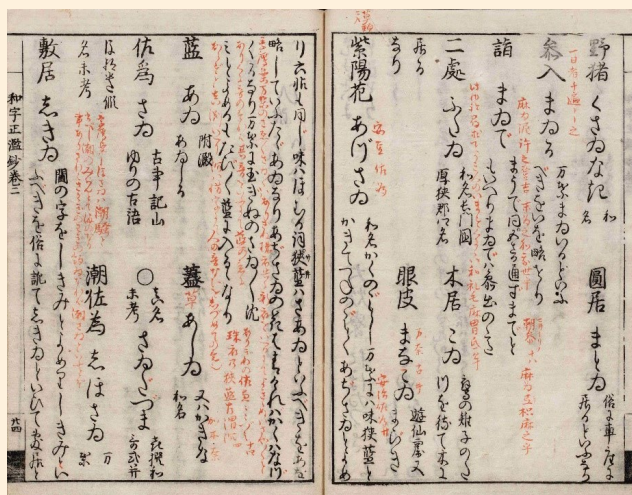
2・5

万葉集類句

江戸遊学中の研究結果、ついに刊行

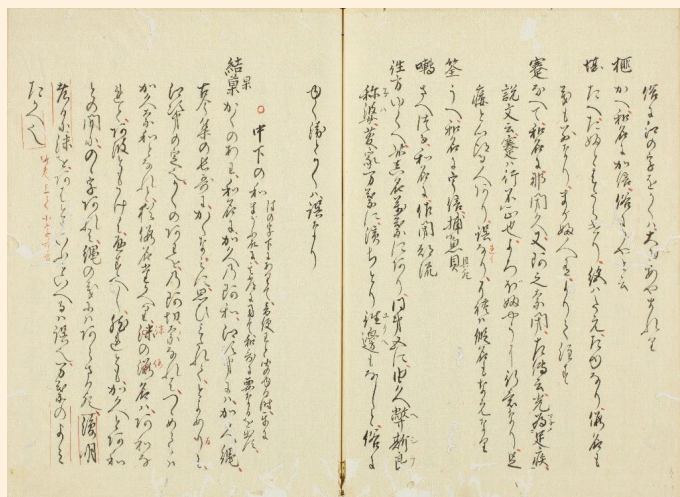
一九歳で江戸に遊学した季鷹は、『万葉和歌集』（宝永六年刊）で、三島自寛、武田有之、安田躬弦、源正賢、橋本節之などと一緒に万葉集を学びますが、その成果のひとつが『万葉集類句』です。万葉集から、短歌・旋頭歌を、第四句の句頭のいろは順に配列した、歌を検索するための便利な本です。季鷹が京都に帰った後、文化三年（一八〇六）に京都の本屋田辺（万屋）作右衛門（刊記では「作左衛門」）の元から出版されました。

（盛田）



2-6

2-7



随所に季鷹の研究の跡が：

2・6 和字正濫鈔

『和字正濫鈔』は契沖(一六四〇～一七〇一)著の、仮名遣いを示した書です。寛政一年(一七九九)に、季鷹は、この元文四年(一二三九)刊本に別の『和字正濫鈔』にあつた書き入れを朱で写し、さらに季鷹自身の考えを書き加えました。最も左の書き入れは、「潮佐為しほさる」について、「しほさる」は「潮さわぎ」に由来する語であるため漢字では「潮騒」と書くのがよい、との季鷹の考えを示しています。

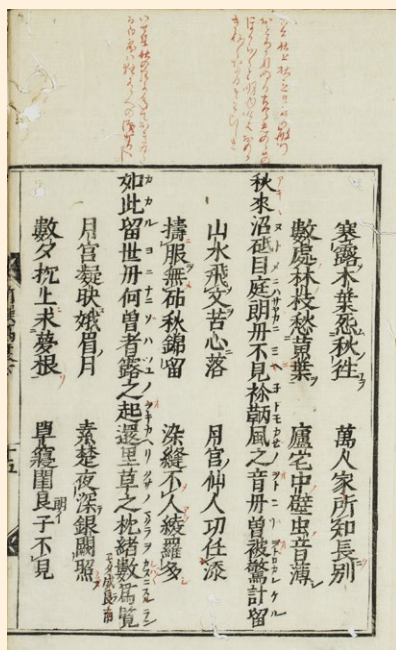
(渡辺)

2・7 和字正濫要略

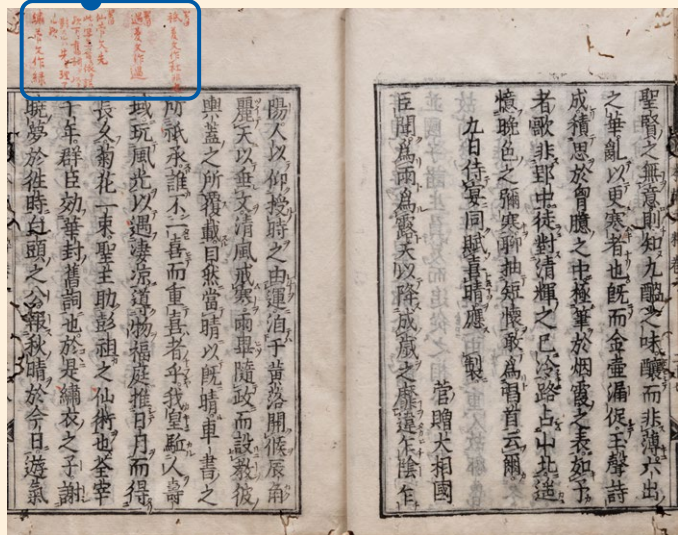
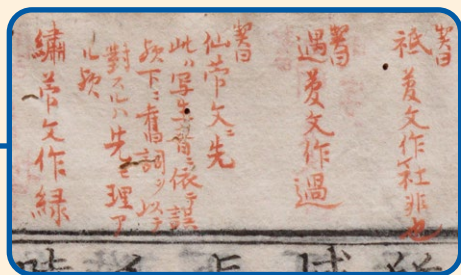
契沖が著した仮名遣いの研究書

『和字正濫要略』は、『和字正濫鈔』と同じく契沖の著作です。およそ三〇〇語について仮名遣いを示し、その根拠について詳しく説明しています。この本には、「浚明」(山岡浚明か)が自身の考えを付け加えた部分も見られます。さらに別に朱の書き入れがあり、他の『和字正濫要略』との対校や、『和字正濫鈔』との対比もなされています。複数の人の手を経てきた一冊であることがわかります。

(渡辺)



2-9



2-8

平安時代の漢詩文集を学ぶ

2-8 本朝文粹

日本の「文」の規範として、藤原明衡が編んだ漢詩文集です。平安時代初期から中期までの、四〇〇を超える漢詩文を収めます。左上に朱で「契曰」とあるのは、契沖の説であることを示したものです。この箇所では「菅文」（菅原道真の漢詩文集『菅家文草』）の本文を異同として示しています。こうした書き入れには、三つめの「契曰」のように根拠を述べている場合もあり、今日の国文学研究においても参照すべきものがあります。

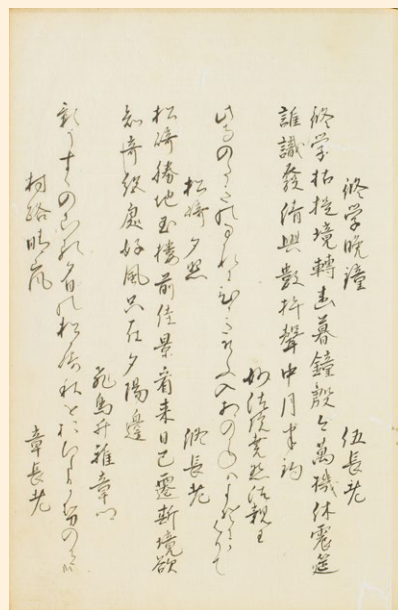
（宮武）

2-9 新撰万葉集

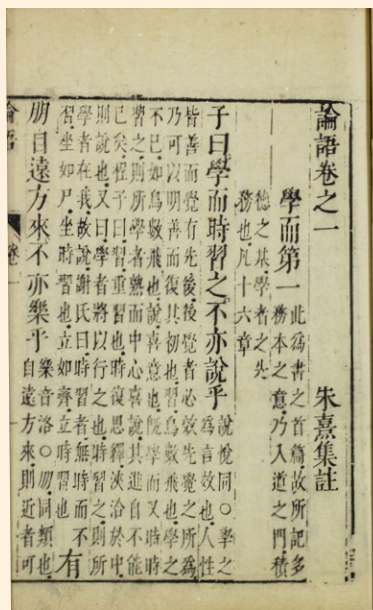
和歌に合わせて詠んだ漢詩

初めて『新撰万葉集』が刊行されたのは寛文七年（一六六七）。二九年後の元禄九年（一六九六）、契沖は本文校訂をして頭注を加えた本を新たに刊行しました。文化二三年（一八一六）、季鷹は自ら跋文を書いた『新撰万葉集』を刊行しています。本資料は、寛政八年（一七九六）、季鷹が寛文刊本に「契沖阿闍梨校本」をもとに朱で頭注などを書き入れたもの。契沖の手が入っていない寛文刊本に書き入れることで、契沖が行なった作業が鮮明に知られたことでしょう。山本家資料には、文化刊本も所蔵されています。

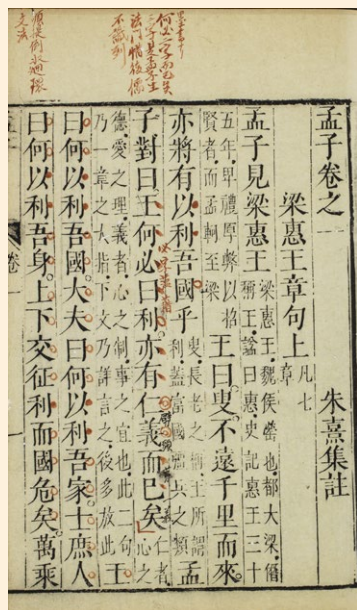
（宮武）



2-10



2-11 論語集註



2-11 孟子集註

日本各地の「八景」が詠まれる

2・10 八景詩歌

長江の中流にある洞庭湖とその周辺の山水が作り出す八つの風景を、「瀟湘八景」といいます。宋代(九六〇～一二七九)から各景に合わせて詩を詠む試みが始められ、それが日本に伝わると、詩とともに和歌も詠まれるようになりました。南北朝時代頃からは、中国にならぬ日本各地で「八景」が選定されるようになります。本資料には、「瀟湘八景」のほか、「修学八景」や「南都八景」などを詠んだ詩歌も収められています。『雲錦翁家集』(2-1)には、甲斐八景のひとつ「夢山春曙」を詠んだ和歌があります。(宮武)

2・11 論語集註・孟子集註

朱子学の教科書、明版か

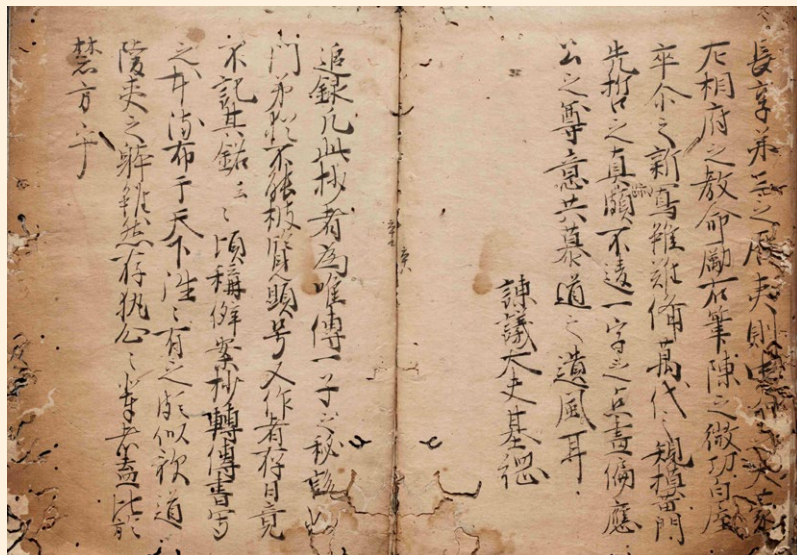
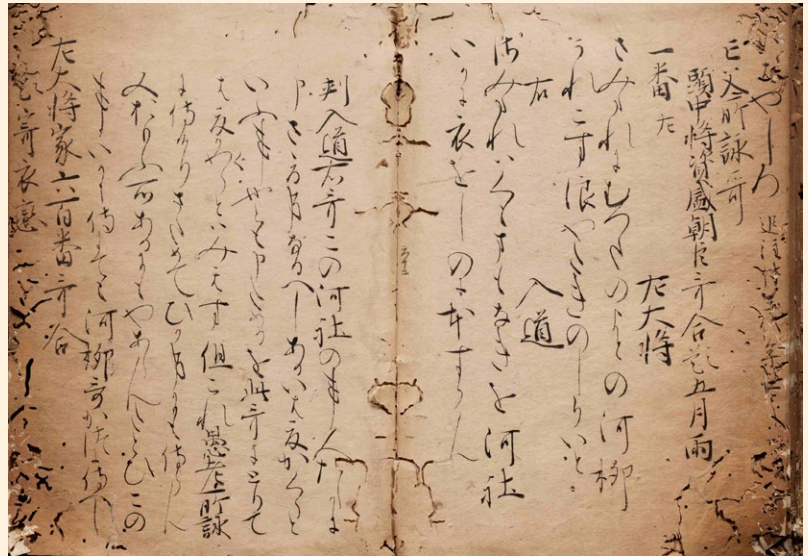
朱子学において、『論語』や『孟子』は「四書」として大切にされました。この本は右下に「朱熹集註」とあり、朱子学の祖である朱熹(一一三〇～一二〇〇)の注であることが知られます。大きな文字がそれぞれの本文であり、小さな文字が朱熹の注です。なお、『孟子集註』に見られる朱の書き入れは頼山陽(一七八一～一八三三)の説です。類似した書き入れを有する伝本はいくつか知られ、一九三二年に刊行された『頼山陽全書』によって活字化もされています。(宮武)

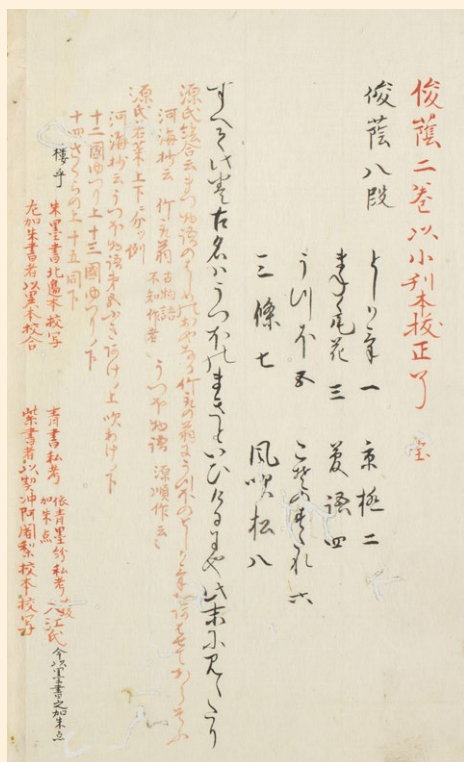
2・12 基綱卿抄出

辿りきた足跡に 思いを馳せる

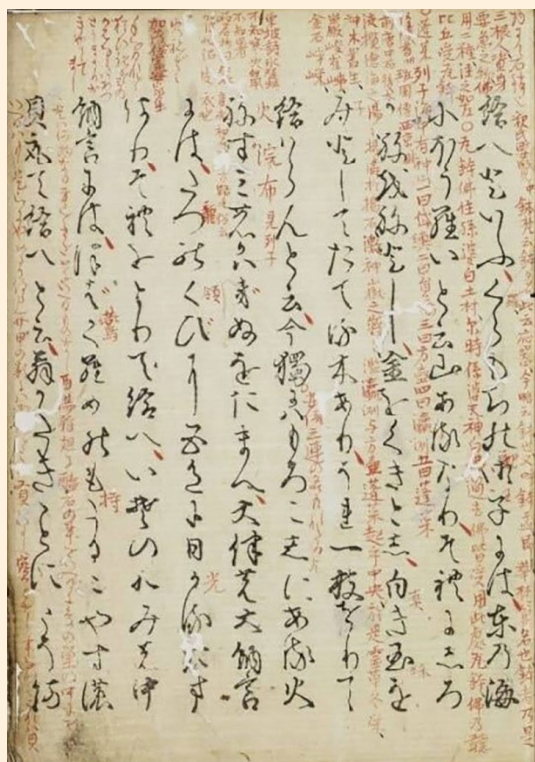
内容は、藤原定家が三代集(平安時代前期に作られた最初の二つの勅撰集である、『古今集』『後撰集』『拾遺集』)の和歌を抜粋して解説した『僻案抄』と、歌語を解説した『河社』という文章です。奥書から、書写者は歌人・能書家として知られる公家の姉小路基綱(二四四―一五〇四)と見られ、室町時代の歌人に親しまれた本であることが分かります。その古典がどのような道を通って私たちの元まで伝わってきたかを知る上で、書写者や旧蔵者の情報は大事な手がかりです。

(大山)





2-14



2-13

古活字版のかぐや姫の物語

2-13

竹取物語
たけとりものがたり

『竹取物語』は日本最古の物語として広く知られています。江戸時代には内容に関する研究が進められ、注釈書も作られました。本書は慶長年間（一五九六～一六一五）に、活字を彫った木の駒を組み合わせて印字した古活字版。その初期の貴重な一本（十行甲本）です。そこに季鷹によって言葉の説明・解釈・出典などが書き入れられています。

（雲岡）

2-14
宇津保物語
うつほものがたり

『源氏物語』にも影響を与える

『宇津保物語』は琴にまつわる音楽の奇跡を軸に、貴族の求婚や政争を描く物語です。平安時代に成立し、『竹取物語』とともに『物語の祖』として尊ばれていました。ところが江戸時代に木版印刷によって流布した『宇津保物語』は、頁の順番が狂って本文の脱落も多く、大変読みにくいものでした。季鷹所蔵本は、様々な本を見比べて本文の異同や誤りの訂正を黒・朱・青・紫で書き入れた写本です。

（雲岡）

2・15

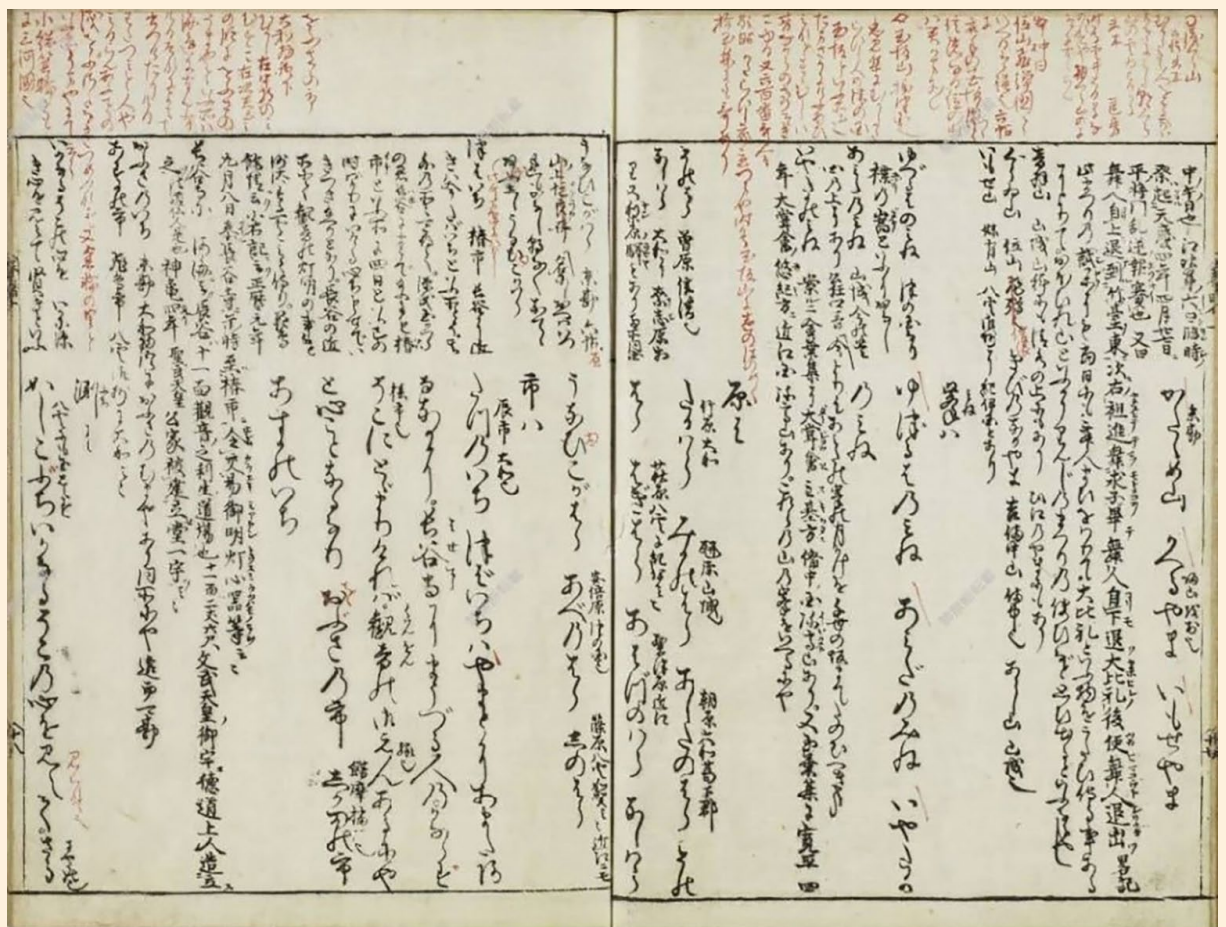
春曙抄 しゅんしょう

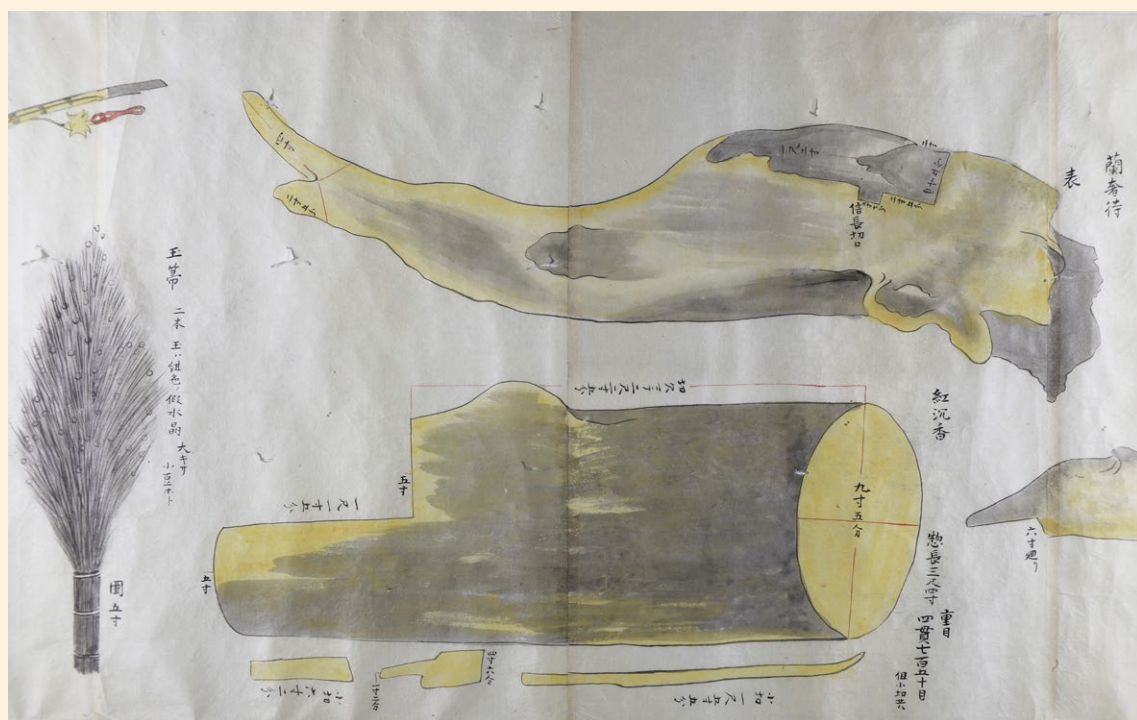
『枕草子』を

もつと知りたい！

『春曙抄』は、清少納言の随筆『枕草子』の本文付きの注釈書です。江戸時代前期に古典学者の北村季吟（一六二四～一七〇五）が注釈・刊行して以降、明治に至るまで多くの人々に読み継がれ、『枕草子』注釈書の中で最も流布しました。『春曙抄』という書名は、『枕草子』冒頭の「春は曙」にちなみます。本資料は季鷹がそこにさらに書き込みを行ったものです。

（雲岡）




$$\frac{2}{16}$$

とう だい じ さん ぞう じゅう もつの うつし
東大寺三蔵什物写

歌人としての好奇心、

珍宝に及ぶ

しょうそういん　ほうもつ　しょうそういん　ほうもつ
正倉院の宝物を彩色で江戸時代に描
写したものです。名香「蘭奢待」は全長、
重量さらに細部の寸法を明記、「信長切
口」の文字も見えます。「玉箒」は、大切
な箒。養蚕の順調を祈り、毎年正月子ねの
日に、蚕の床を掃く箒をガラス玉で美し
く飾りお供えをするのが、皇后の仕事
でした。描かれているのは天平宝字二年
(七五八)、大伴家持が「初春の初子はつねの今
日の玉箒手たまはしに取るからに揺ゆらく玉の
緒」(『万葉集』・卷二〇)とうたった玉
箒そのものです。現在も正倉院に伝え
られ、令和元年(二〇一九)、御代みよがわり
の正倉院展で展示されました。(小林)

【コラム D】

京都の^{こく}国学と^{がく}上賀茂の文庫

上賀茂神社には^{みつてぶんこ}三手文庫と呼ばれる文庫があります。これは本来、上賀茂の^{しやけ}社家が共同で管理した、多岐にわたる内容の書籍群でした。しかし、蔵書の多くは明治初期に売却されてしまい、現在では、江戸時代中期の国学者^{いまいじ}今井似閑^{かん}（二六五七～一七二三）が奉納した書物が主体です。

似閑は、当時の社家^{かも}賀茂清茂^{きよしげ}（一六七九～一七五三）と親交があった人物でした。国学を大坂の国学者^{けいちゆう}契沖^{けいちゆう}（二六四〇～一七〇二）から学んだため、三手文庫に奉納された書籍には契沖関係の書物が多く含まれています。

契沖の学問は、師匠の教えや權威的な説を鵜呑みにするのではなく、古い書物の内容から独力で答えを導き出す実証的な方法でした。その学問スタイルは契沖以降の国学者に大きな影響を与え、契沖は「近世国学の祖^そ」と呼ばれます。この点からも、上賀茂神社は国学と密接な関係を持っていると言えます。

江戸時代中後期になると、社家の中では賀茂^{かも}季鷹^{すえたか}が国学に熱心でした。契沖の著作のほか、^{かだのあすまろ}荷田春満^{かだのあすまろ}（一六六九～一七三六）、賀茂^{かも}真淵^{まぶち}（二六九七～一七六九）、本居^{もと}宣長^{のりなが}（一七三〇～一八〇一）など、多くの国学者の書を蒐集し、書き入れを加え、時にその説に反論しながら、学問を修めていきます。なお、宣長は季鷹の別荘「雲錦亭^{うんきんてい}」を訪れており、実際に和歌をやりとりした記録も残っています。

季鷹の広い交友関係の中には、京都の国学者である富士谷^{ふじた}成章^{なりあきら}（一七三八～一七七九）・御杖^{みつえ}（二七六八～一八二三）父子もいました。成章と御杖は特に言語研究で研究成果を残した学者です。季鷹所蔵本には富士谷家の所蔵本を書写したのも見られ、書物のやりとりを通して助け合いながら、互いに切磋琢磨^{せつさくたくま}した様子が垣間見えます。

上賀茂神社および社家の季鷹は、京都の国学の一拠点を創出したと言えるでしょう。（大山）

【コラム E】

賀茂季鷹の魅力

季鷹すえたかは一二歳ありすがのみやで有栖川宮家の諸大夫しよだいぶとして、桃園ももどの・後桜町ごさくらまち・後桃園天皇ごももどのの歌道師範しはんを務めた職仁親王よりひとのお傍そばに仕えました。二三歳で万葉集の研究を始め、一五歳で宮家の当座歌会とうざかいで富士谷成章ふりあきら・日野資枝等すけきと同席、一六歳で職仁親王よりひとから靈元天皇勅撰『新類題和歌集』四三冊の出版掛に命じられるなど優れた才能を持つ早熟な少年でした。

一九歳で、三島景雄かげお（幕府御用達の呉服商、関東の有栖川宮家門人を束ねる）を頼って江戸に遊学し、荷田在満かだのありまろの子御風のりかぜを師として古典校勘や考証学を学びます。江戸では古典籍を借りて書写し、購入するなどして貪欲に良書を蒐集して研究を進め、著書を執筆します。二六歳の時には、景雄等と共に古典学の知識を活かし、平安時代の宮廷で行われていた物合ものあわせの儀式を、一八世紀後半の江戸で再現しようと、大名、旗本、武家の母や妻、商人やその妻、医師、僧侶、香

の師、書家、茶人、本屋、遊女などを集めて「角田川扇合がわ」を開催しました。

家督かどくを継ぐために京都に帰郷した季鷹は、上賀茂の地に、吉野の桜・竜田の紅葉を移植し、邸内に明神川みょうじんがわが流れる別荘「雲錦亭うんきんてい」を建てて文庫を造り、五八歳で柿本人麻呂かきのもろひとまろ・山辺赤人やまべのあかひとの木像を祀った歌仙堂かせんどうを造りました。歌人の聖典とされる古今集仮名序の世界を上賀茂に可視化したのです。「和漢の書籍数千巻」と言われた蔵書を用いて生涯をかけて研究を続けると共に、有栖川宮家の門人として和歌に巧みで書を書くよした季鷹は、全国に多くの門人を育てました。季鷹は大田南畝おおたなんぼとの交遊があるなど、狂歌も能くし、亡くなる直前まで枕元の親族・門人に滑稽を言うほどユーモアに溢れていました。一八〜一九世紀の人的交流・書物交流の中枢ちゆうしうとして活躍した多才な人物でした。

（盛田）

第三部

上賀茂社家としての山本家

上賀茂神社の門前一带は、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。その景観は、古代社会において山城国北部一带に勢力を有していた古代豪族賀茂県主一族の氏神としての社（後の上賀茂神社）が核となっていました。中世社会を迎えると、神社に仕える神職たちと田畑に従事した農民たちによる門前集落が形成されました。とりわけ上賀茂神社門前に発達した「社家町」は、神社境内から流れ出す河川（明神川）をはさんで、実に美しい家並みを今に伝えているのです。

社家は中世から一四〇家が定まっており、門前に集住していました。その社家町とは七町から構成されていて、江戸時代中期では農民等を含め二八〇〇余人が生活していました。社家の敷地は標準が四〇〇坪といわれていますが、一〇〇〇坪に及ぶものもあり、いずれも広い庭をもっていました。特に明神川より水を庭に引き入れ、再び川に戻すといった手法で住宅庭園を形成していたのです。

社家の山本家はなかでも抜きん出た存在で、邸内に明神川そのものが流れています。その明神川に沿って、歌聖が祀られた歌仙堂が建立されています。季鷹の邸宅「雲錦亭」からは明神川に架かる石橋を渡って歌仙堂に至ります。季鷹の趣向を凝らした雲錦亭と、その邸内庭園は素晴らしく、社家住宅のなかでも群を抜く存在といえましょう。

こうした上賀茂の風土に育まれた季鷹は、社家としての教養を身に付け、文化人たちとの交流を深めていったのでした。

（宇野）

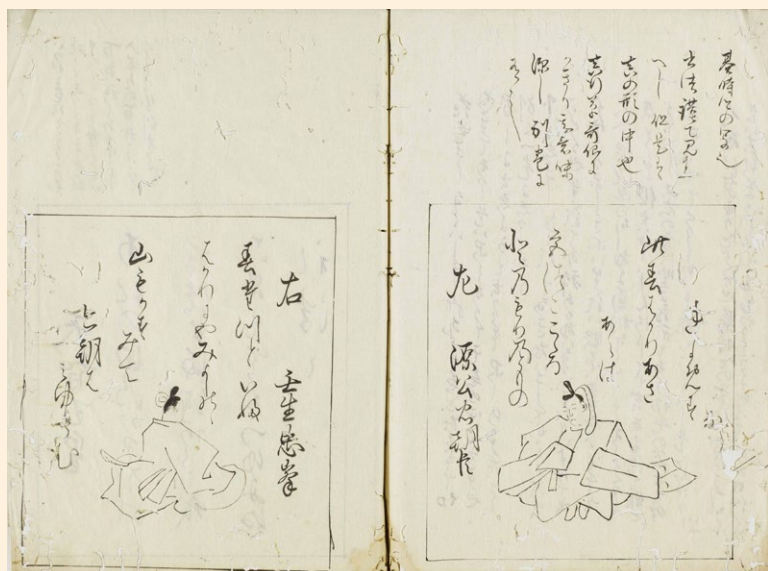
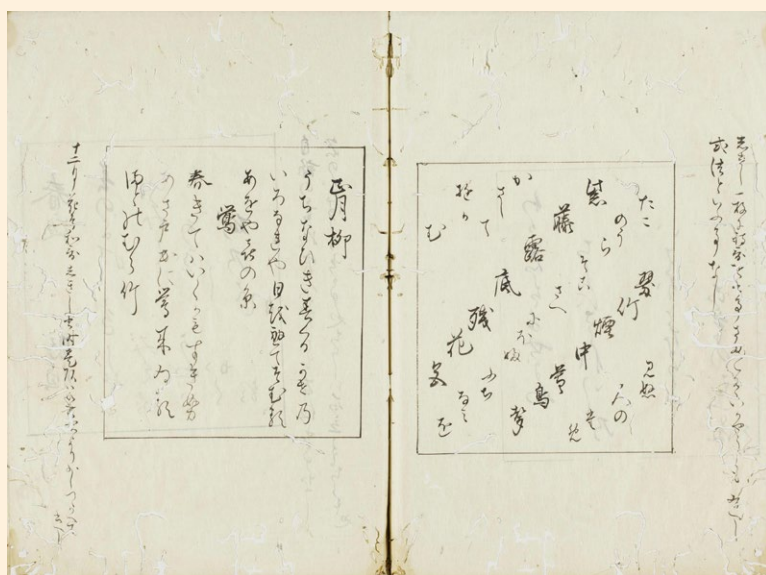
3・1 持明院家色紙式

由緒正しい書道のお手本

持明院家は室町時代の公家持明院基春（二四五二～一五三五）を祖とする入木道（書道）の家柄です。この本には、和歌や漢詩を「色紙」に書く際の散らし方の手本や、細かい注意事項が記されています。色紙とは、ほぼ正方形の色紙に、和歌や漢詩などを書き付けたものを言います。和歌の場合は整然と書くのではなく、各行の高さを変えたり、各句をばらばらに配置したりする「散らし書き」が多く用いられました。作品は屏風や掛軸に貼るなどして鑑賞されました。

著名人となると詩歌の揮毫を依頼されることもよくありますから、持明院家の教えを記したとされるこの本は、正統な書道の実用書としても重宝したことでしょう。なお奥書には、幕府の右筆を務めた森尹祥（一二一〇～一七九八）から季鷹が借りて書写したとあります。

（大山）



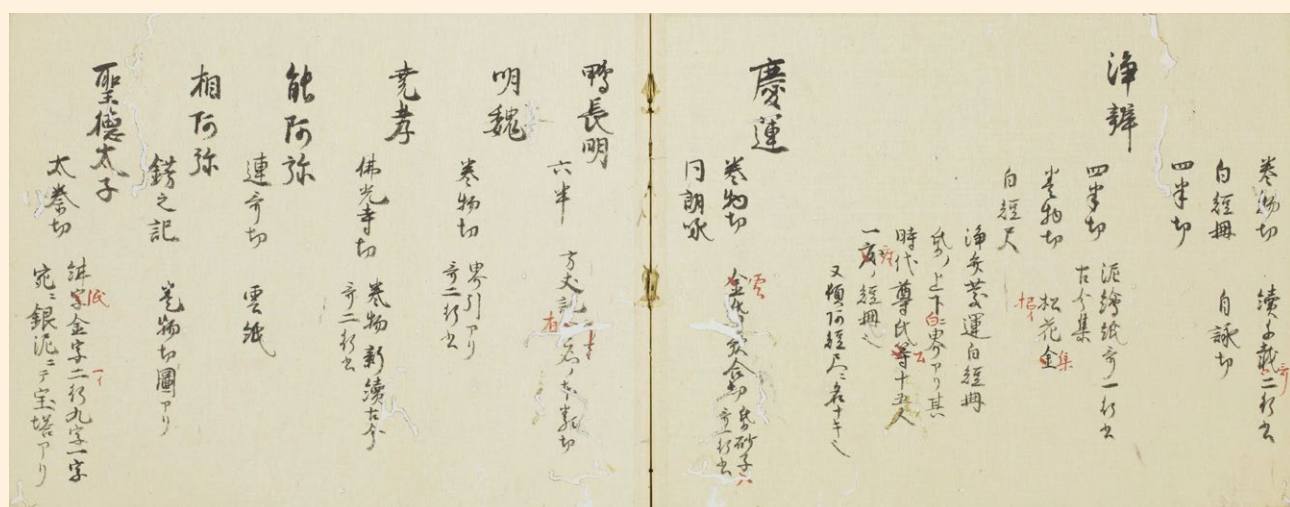
3-2 古筆名物集

古人の筆跡を追いかけるロマン

古人の筆跡を伝えるとされる書物の一部を切り出して紙片としたものを「古筆切」と呼び、江戸時代にはそれらを鑑賞することが流行しました。特に古いものや著名人の古筆切は「名物切」とされ、コレクターの羨望の的となりました。名物切にはそれぞれ固有の名前が付けられます。たとえば、聖徳太子が書いたとされる法華経の古筆切が「太秦切」の名で現代に伝わります。名前の由来は、これが京都太秦の広隆寺に伝来したことによります。また、平安時代後期の歌人藤原顕輔（一〇九〇～一一五五）が書いたとされる『古今和歌集』の古筆切は「鶉切」と呼ばれています。こちらは料紙に白い雲母で鶉が描かれていることが名前の由来です。また、古筆切の筆者は「伝称筆者」と言われ、あくまで筆者として伝えられている人物に過ぎません。実際には誰が書いたか分からないものも多くあります。

『古筆名物集』は、江戸時代中期の古筆鑑定家である神田道伴（一六七八～一七四九）が書いたとされる、名物切のカタログです。読者は、そこに書き入れられた紙の色や模様などの特徴から、手元にある古筆切がどれに該当するか確認したり、まだ見ぬ古筆の姿を空想したりしたのでしょうか。

（大山）



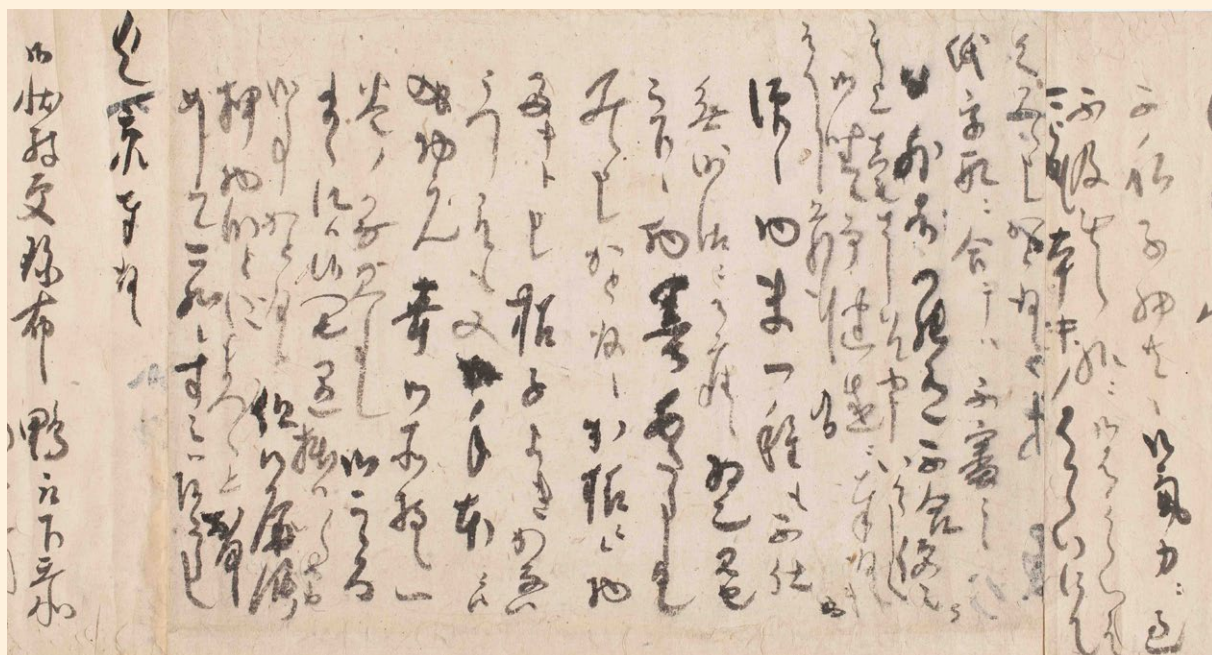
3-3 書札

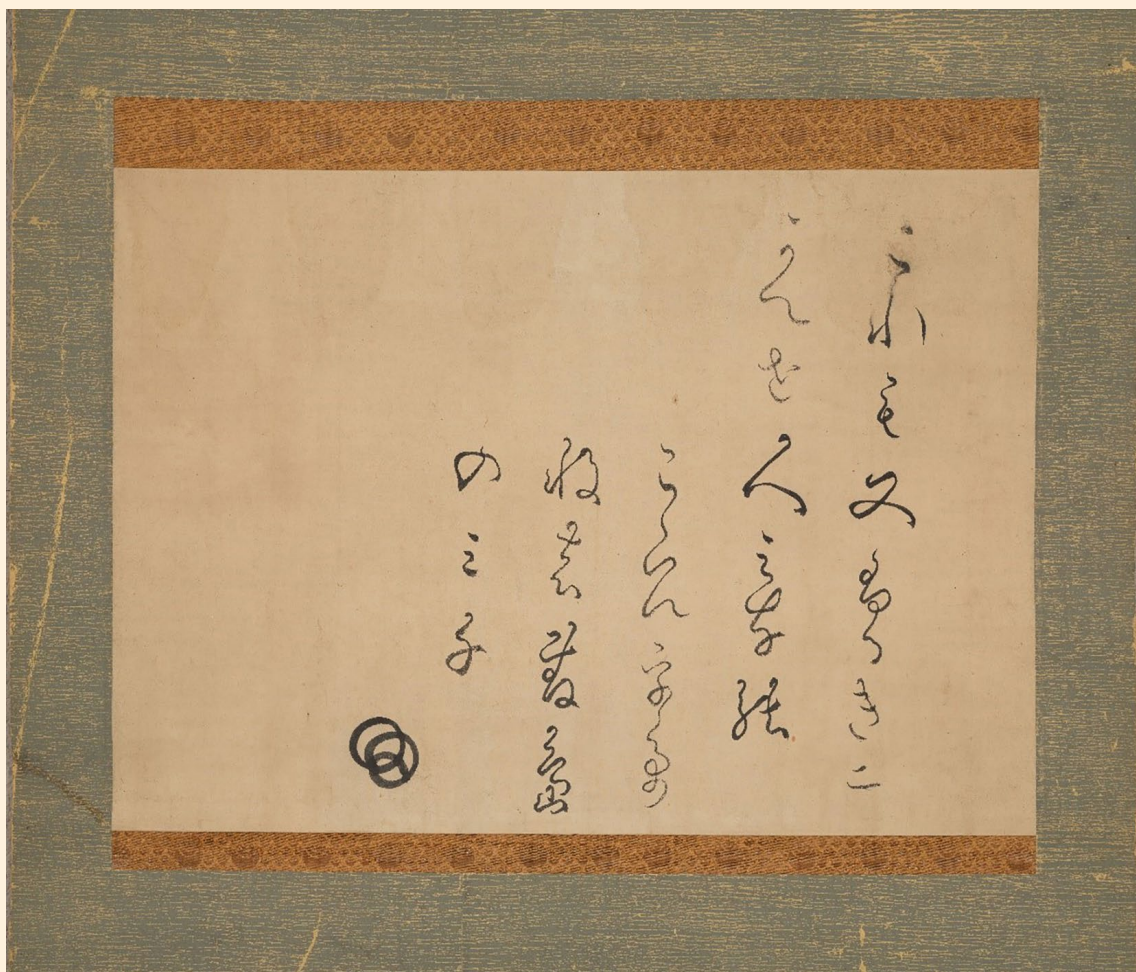
上賀茂ゆかりの書家

江戸時代初期の書家^{しよか}で上賀茂神社の神職の藤木敦直^{あつなお}（二五八二〜一六四九）から、門人^{もんじん}であった呉服商^{みしまゆうとく}の三島祐徳^{みしまゆうとく}へ送った書状を継いだ卷子本^{かんすほん}、いわゆる「巻物」と呼ばれる形態の本です。卷子本は、複数の紙をつなげ、末尾に軸を付けて巻き納めます。冊子のように見たい場所をすぐに開くことはできませんが、貴重なものや保存を目的とする場合に多く用いられました。

本資料には祐徳の書を見た敦直の感想や、書道関係の内容のほか、贈り物への御礼、灸治^{あうじ}のこと、祐徳の体調を気遣う言葉など、日常的なやりとりも多く見えます。墨色に敦直の人柄がにじみ出ています。季鷹^{すえたか}の箱書^{はこがき}には、季鷹が江戸へ行った際に三島家の子孫から贈られた貴重なもの、とあります。書道に対する情熱によって季鷹が譲り受けることになったものでしょうか。

（大山）





3・4

妙法院宮真仁
法親王懷紙

歌学復古のリーダーへの
思いを胸に

家督^{かどく}を継ぐために江戸から京都に帰郷した季鷹^{きとう}が、光格天皇^{こうかく}の実兄妙法院^{みょうほういん}宮真仁^{みやしんにん}法親王^{ほっしんのう}に願^{ねが}って手に入れた和歌^{わか}懷紙^{かいし}です。当時、京都では復古^{ふこ}(古代を捩^なり所として古代に倣^ならう)が流行していましたが、歌道^{かどう}のみはブームに乗り遅れていました。季鷹は江戸にいる頃から真仁法親王を歌学復古のリーダーと考えており、「歌道もまた復古せよ」と詠まれたこの和歌の軸を、上賀茂にある別荘「雲錦亭^{うんきんてい}」に掛けて復古を目指しました。

(盛田)

3・5

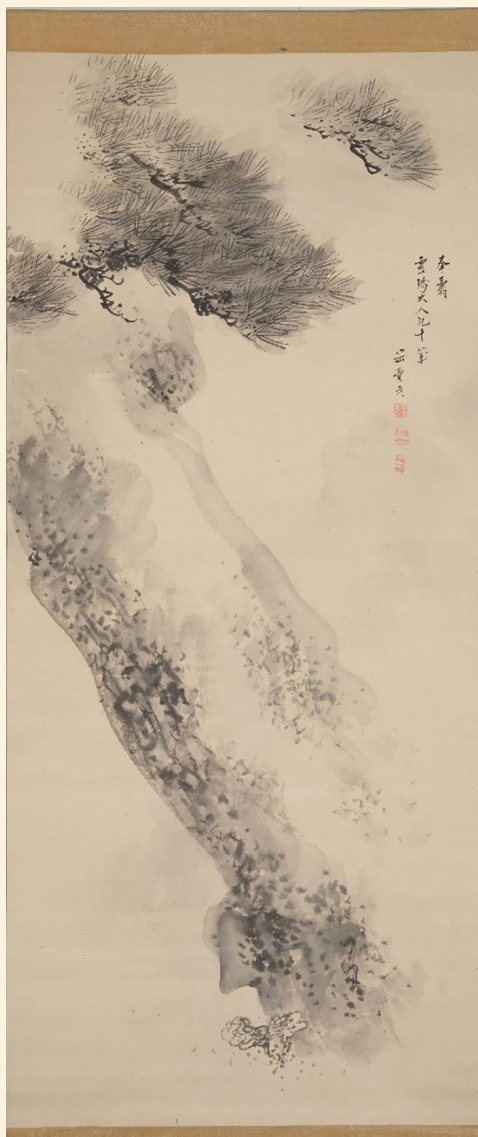
おかもとよひこがまつのず
岡本豊彦画松図

すえ たかく じゅうの が
(季鷹九十賀)

誰よりも長寿を願った季鷹

江戸時代後期の四条派の画家岡本
豊彦が、季鷹の九〇歳のお祝いに贈った
松の図です。一年を通じて色を変えず、
長寿の木として尊重された松を中央に
描き、その根元には発生するとめでたい
ことが起る前兆とされる「靈芝」という
きのこが描かれています。実際には季鷹
は八八歳で亡くなりましたが、生前、
一〇〇歳まで生きたいと言い、晩年にな
るにつれて実年齢よりも高い年齢を称
し、九〇歳の祝を京都円山で行いまし
た。

(盛田)



3・6 久世通根画鶴

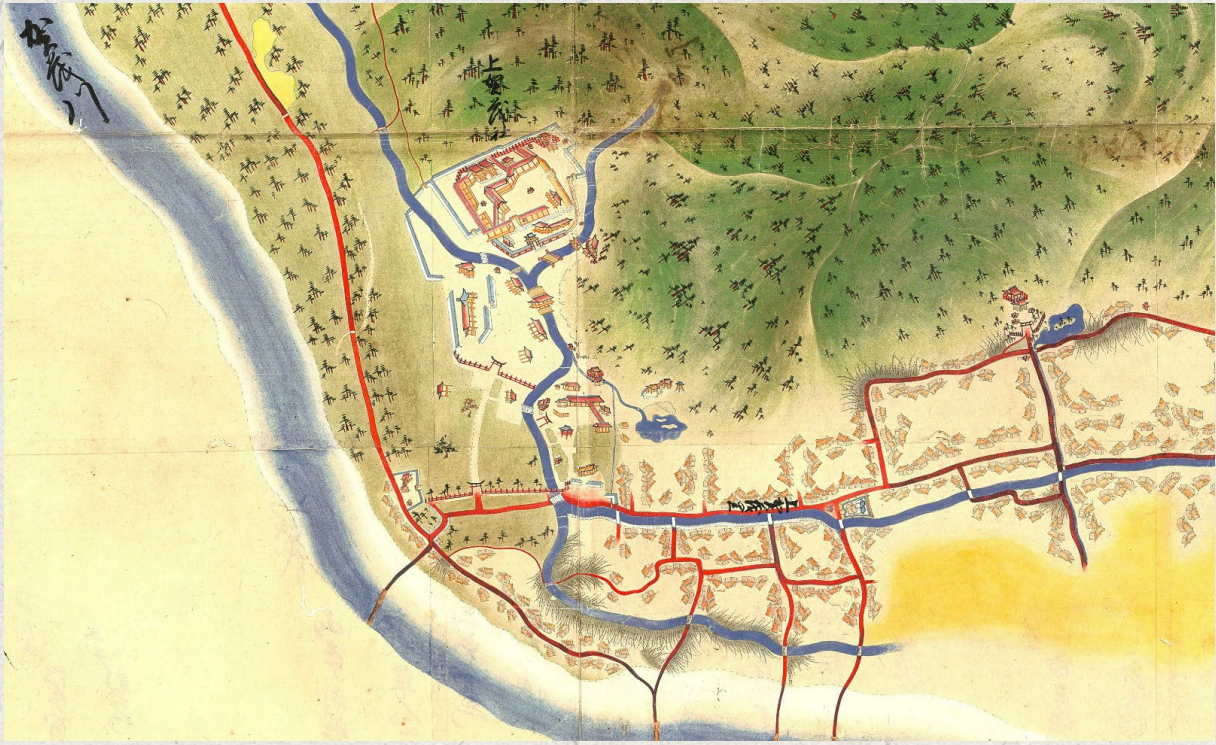
光格天皇歌壇の人々と季鷹

長寿の象徴とされる白菊と雌雄の鶴を描いたのは、光格天皇が即位してすぐの和歌鍛錬の会のメンバーとして選ばれ、その後、光格天皇の門人となり和歌宗匠として活躍した宮廷歌人久世通根（一七四五～一八一六）です。賛は、中世以来の和歌の家の宗匠として宮廷歌会を支えた冷泉為泰（一七三五～一八一六）です。同時期に活躍した季鷹も、光格天皇が石清水臨時祭を再興する際、儀式に用いられる和歌について尋ねられ考証を行いました。（盛田）



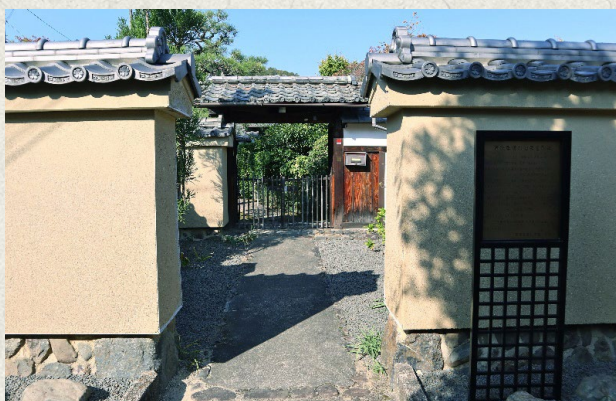
【コラム F】

上賀茂の季鷹すえ たか



①賀茂別雷神社所蔵〈重要文化財〉『賀茂山全図』

江戸時代の上賀茂社家町しゃけまちを詳細に描いた絵図えずは限られています。享保三年（一七二八）の「賀茂山全図」かもやまぜんず（賀茂別雷神社蔵〈重要文化財〉）下部に描かれている社家町図は貴重です①。家屋の立地（家並み）や形式（草葺屋根入母屋造）は、おおむね当時の様子を伝えています。大田神社から南下し、明神川みょうじんがわと交差する道の西側には山本家とおぼしき家が存在しています（後の雲錦亭の場所）。さらに安永年間（一七七二～一七八二）の景観を描いたとされる「賀茂社家宅七町大旨之図」たいし（個人蔵）では、同地点に山本家の屋敷がしっかりと確認できます。季鷹の別荘としての役割を果たした雲錦亭については、季鷹が江戸から帰郷した後の享和元年（一八〇二）に構えられたと考えられています。



④山本家(雲錦亭)の外塀と門



②雲錦亭の軒先瓦



⑤雲錦亭のしつらい(左・岸駒の襖絵)



③雲錦亭と庭園

季鷹の帰郷後の主たる活動拠点は雲錦亭でした。雲錦亭は「社家住宅」と総称されるものとは異なり、いわゆる趣向を凝らした別荘的建造物でした。その象徴的なものに屋根瓦があります。とりわけ「吉野の桜と竜田の紅葉」が意匠されたカラフルな軒先瓦②は注目されます。雲錦亭は美しい庭にも囲まれていました③。また表玄関に至るまでには、綺麗な外塀と潇洒な門を通らねばなりません④。建物内部は数年前まで日常生活の場でもありましたから、少しは改装されていますが、それでも往時の面影を残しています。たとえば床の間の横の襖絵は岸駒(岸派の絵師)の作品ですが、他のさりげないしつらいにも質の高い季鷹の感性を感じさせてくれます⑤。



⑥歌仙堂(手前)と明神川



⑦歌仙堂に安置される山部赤人像(左)と柿本人麻呂像(右)

雲錦亭のもう一つの特徴は、歌仙堂かせんどうの存在です。文化八年(一八一二)、季鷹すえたかが五八歳の時に敷地内に建てました(⑥)。邸内を貫流する明神川みょうじんがわに沿うように設けられ、扉は川方向に向いています。内部には歌聖かせいたる柿本人麻呂かきのものひとまろと山部赤人やまべのあかひとが厚畳あつじょうに座しています(⑦)。歌人季鷹の意気込みがうかがえます。

季鷹こくがくしやは国学者でもあり、とりわけ和歌・狂歌・書に秀でた、京を代表する文人ぶんじんでした。求めに応じて書いたさまざまな墨跡も残されています。あまたあるなかで、たとえば「京枅きやうはち図屏風」は京枅の製造・販売・検査を担っていた福井家に伝わる屏風です(⑧)。絵師の松村景文まつむらけいぶん(呉春ごしゅんの弟、四条派の絵師)が天保五年(一八三四)に描いたもので、そこに季鷹の和歌が書き添えられています。季鷹自ら八二歳と記していますが、年齢を感じさせない素晴らしい書体です。



⑧「京枳図屏風」(京都市歴史資料館寄託)



⑨季鷹歌碑

このようにして現代社会に至っても、季鷹の存在は上賀茂にしっかりと根付き、伝えられています。二〇〇六年(平成一八)、賀茂季鷹歌碑建立委員会は雲錦亭が残る山本家敷地内に歌碑を建立しました(⑨)。季鷹を顕彰するモニュメントとして活かされることを願ってやみません。

(宇野)

【コラム G】

賀茂の水流と社家町の風土

賀茂氏と川との関係は深く、「山城国風土記逸文」に賀茂氏が大和の葛木山から新たな天地を求めて山代河を下り、葛野河と賀茂河との合流点から賀茂川を遡行し、上賀茂の地に居住する三つの川に関わる一文と、賀茂別雷命の誕生にまつわる瀬見の小川を流れる丹塗矢の伝承が記されています。賀茂氏が賀茂川から取水した水は、上賀茂神社内の御手洗川を流れ、御物忌川と橋殿で合流し、「ならの小川」に名称を変え、境内を出て明神川となります。この短い区間に四つもの名称を持ち、御手洗川や禊を詠んだ和歌も多いことから、賀茂氏が川を重視してきたことがわかります。

室町時代には周囲に社家町が形成された明神川①は、西から東への流れを持つ農業用水で、上賀茂村本郷(岡本郷)の石高は一六〇四石(二六七八年時点)と、豊穰をもたらす源です。放水路で水量を調整できることから、水害防止の河川改修を必要としないため、江戸期からの歴史的風致を形成しています。内川橋から藤ノ

本神社へと歩くと、土堀、石橋などに目が奪われます。川沿いの石垣には空洞があり②、邸内へと引き込まれた水は庭の水路となり、再び川へ戻されます。水路には禊石があり、神官は禊石に立ち社殿を向いて水路の水で身を清めて出社したと伝わっています。また、雨水を地中へ排水する仕掛けである「龍の口」もあります。

(鈴木)



①明神川と社家の家並



②明神川の取入口

〈紹介〉

国文学研究資料館

National Institute of Japanese Literature

国文学研究資料館（東京都立川市）は、国内各地に所蔵されている日本文学とその関連資料を大規模に集積し、日本文学をはじめとするさまざまな分野の研究者の利用に供するとともにそれらに基づく先進的な共同研究を推進する、日本文学の基盤的な総合研究機関です。集積した約三〇万点（三二二〇〇万コマ）に及ぶ画像デジタルデータは、「国書データベース」[<https://kokusho.nijl.ac.jp/>]で無料で公開していますので、皆さまも一度アクセスしてみてください。

京都市歴史資料館に寄託された山本家伝来の古典籍資料について、京都・滋賀に在勤の日本文学・神道文化史研究者の協力のもとに、定期的に文献調査とデジタル撮影を進めています。集積したデータを基盤として、二〇二二年度からは新たに共同研究「京都市歴史資料館寄託山本家資料など賀茂両社伝来の古典籍資料に関する研究」（代表 小林一彦京都産業大学教授）を開始しております。賀茂別雷神社（上賀茂神社）と賀茂御祖神社（下鴨神社）の両社にまたがる地域の文化圏で形成された杜家の文事のありようを、メンバー全員で深く追究しています。

（中西）



データ駆動による課題解決型
人文学の創成プロジェクト
<https://lab.nijl.ac.jp/humanitiesthroughddps/>



国書データベース
<https://kokusho.nijl.ac.jp/>
使い方【PDF】



くずし字を読む
<https://www.nijl.ac.jp/koten/kuzushiji/>



書物で見る日本古典文学史
<https://www.nijl.ac.jp/etenji/bungakushi/>





〈紹介〉

京都産業大学

京都産業大学は一九六五年（昭和四〇）に、経済学部・理学部の文理二学部で、京都市上賀茂の地に創設されました。学祖の荒木俊馬は「いかなる国家社会においても、大学は最高の研究・教育の機関である。大学の使命は、将来の社会を担って立つ人材の育成にある」と建学の精神を掲げました。翌年には計算機センターが完成、稼働し、さらにその翌年には経営学部・法学部・外国語学部の三学部を増設、また気象庁に次いで大型電子計算機 TOSBAC-3400 を導入、いち早く履修申告の電子化を開始するとともに、全学の情報化を推進し「情報の京産大」と呼ばれるようになりました。その後も不断の歩みを続け、文化学部・生命科学部・情報理工学部・国際関係学部・現代社会学部を相次いで開設、現在では、文系・理系一〇学部一〇研究科へと拡充、約一万五千人の学生を擁する総合大学へと成長しました。また卒業生も、約一六万人にのぼっています。



研究面では、開学二年目に世界問題研究所が設置され、その後も日本文化研究所、感染症分子研究センター（旧鳥インフルエンザ研究センター）を発展改組、神山宇宙科学研究所など、七つの研究機関が、それぞれ学際的・総合的な共同研究、研究調査に必要な資料・参考文献等の収集及び管理、国内外の大学及び研究機関との学術・研究交流、学術誌の刊行、研究発表会・講演会及びシンポジウムの開催などの事業を行っています。

本学は、創立五〇周年を迎えた二〇一五年（平成二七）に、二〇三〇年度（令和二二年度）までの一五年にわたる中長期事業計画『神山STYLE2030』を策定しました。また、大学名の「産業」を、本学独自の考えに由来して、「むすびわざ」と読みととき、社会と大学を「むすんで、うみだす」、育成すべき学生像「むすぶ人」を、スローガンとして掲げました。二〇二五年（令和七）には創立六〇周年を迎えます。建学の精神の実現に向け、すべての学部・研究科及び学生が広大な「神山キャンパス」に集結する「二拠点総合大学」という特色を活かし、領域を越えて多様な人や知識をむすび、そこから新しい価値をうみだす大学づくりに、全学を挙げて取り組んでいます。（小林）



〈紹介〉

京都市歴史資料館

京都市歴史資料館は、京都の歴史に関する資料の保存と活用を図り、市民の文化の向上および発展に役立てることを目的として、一九八二年(昭和五七)一月に開館しました。歴史資料館の前身である京都市史編さん所では、『京都の歴史』全一〇巻、『史料 京都の歴史』全一六巻の編さんを行ってきましたが、市史編さん作業を通じて、京都市内の旧家や社寺から数多くの古文書の寄贈・寄託を受けてきました。実業家から現在地の寄付を受けて、貴重な歴史資料を未来へと引き継ぎ、さらに収集と調査研究を進める施設として当館は開館しました。

当館が収蔵する資料は、古文書を中心とする歴史資料が約二〇万点に及びます。国の重要文化財に指定されているものとして、「兵庫北関入船納帳」ひょうごきたせきいりふねのうちよう「福井家旧蔵京枡座関係資料」ふくいけきやうぞうきやう「八瀬童子関係資料」やせどうじ「岩倉具視関係資料」いわくらともみ『古今和歌集卷下』こきんわかしゅうまきげ(賀茂季鷹かものはすえ関係典籍類)があります。京都市指定・登録文化財も多く含んでおり、今回展示する当館寄託の賀茂季鷹関係典籍類は二〇一一年(平成二三)四月に京都市指定文化財に指定されています。

こうした収蔵資料についての研究の成果を、展示や講座、図書の



刊行などにより広く紹介しています。当館一階の展示室ではテーマ展・特別展・企画展を開催し、時代・地域・人物などを取り上げ、各テーマに即した古文書や絵図えずなどを展示し解説を加え、会期中にはギャラリートークの機会も交えて、来館される皆様に京都の歴史に理解を深めていただけるよう努めています。

古文書に親しんでもらう機会として古文書講座を定期的に開催しています。昨年度は春・秋・冬に連続講座を実施し、入門編・応用編など受講者のニーズに合わせたコースを開講しました。親子で歴史を学んでもらう機会として、夏休みなどに親子歴史教室を開催しています。昨年度は「自分の花押かおうを作ろう!」をテーマに、参加者が作成した花押を缶バッジにして持ち帰ってもらう企画が好評でした。

また古文書を撮影したフィルムが二〇〇万コマ以上、京都の歴史に関する文献をはじめ歴史関係の図書が約二六〇〇〇冊余りあります。二階の資料閲覧室では、古文書の写真や図書を閲覧することができます。京都の歴史に関する相談や文献・資料の紹介も行っています。

インターネットでは「フィールド・ミュージアム京都」として、市内全域に一〇〇〇か所以上ある史跡の石標や道標の写真と解説、それらの所在地を示した地図などを発信しています。
(松中)

出品リスト

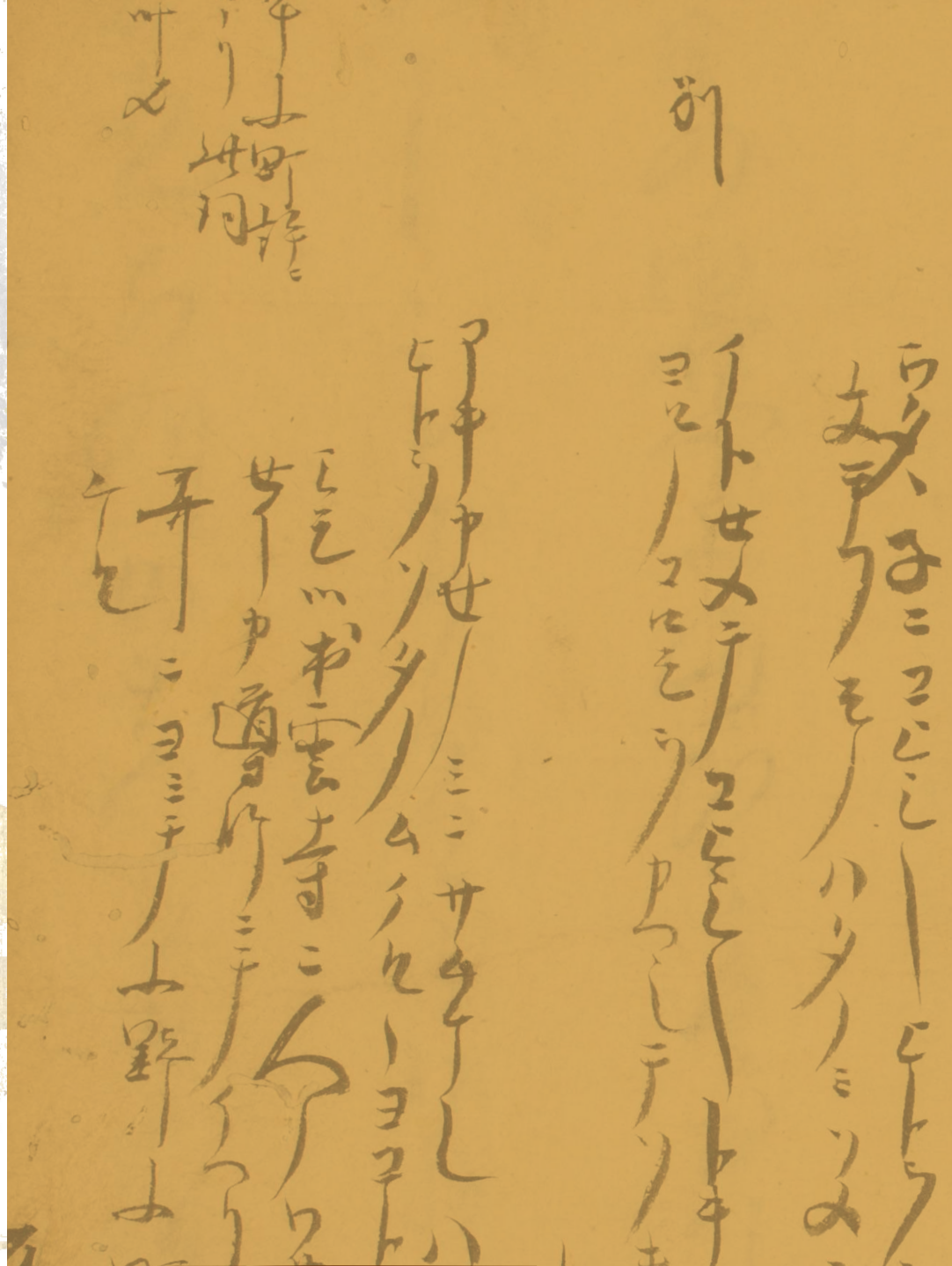
第一部「みやび」への憧れ		書名	書写／刊行年次	書型冊数	整理番号 *備考
●	1-11	清輔本片仮名古今和歌集	〔鎌倉中期〕写	大一帖(栞)	三
●	1-2	〔為家卿真蹟写百人一首〕	〔江戸中期〕写	半仮一冊	一〇二
●	1-3	季鷹肖像(模本)	〔江戸後期〕写	一幅	A二七
●	1-4	歌仙堂書籍出納録	〔江戸後期〕写	大仮一冊	九六五
●	1-5	歌仙堂文庫の蔵書箱	〔江戸中期〕作	二点	
●	1-6	歌仙堂書籍目録	〔江戸後期〕写	大仮一冊	九六八 *包背装
●	1-7	賀茂県主年齢次第	〔江戸後期〕写	半仮一冊	六三一
●	1-8	源氏物語	〔江戸中期〕写	半四五冊	六二二
●	1-9	源氏物語系図	〔江戸中期〕写	大一冊	一八
●	1-10	源氏八景	〔江戸中期〕写	大一冊	二二
●	1-11	左大臣高明集	〔江戸中期〕写	大仮一冊	三四四
●	1-12	御堂関白集	〔江戸中期〕写	大仮一冊	三六六
●	1-13	貫之集	〔江戸前期〕写	大一冊	四
●	1-14	大江千里集	〔江戸中期〕写	大仮一冊	三三五
●	1-15	安法法師集	〔江戸中期〕写	半仮一冊	三七九
●	1-16	清慎公集	〔江戸中期〕写	大仮一冊	三四五
●	1-17	清慎公集	〔江戸中期〕写	大仮一冊	三四六
●	1-18	馬内侍集	〔江戸中期〕写	大仮一冊	三七四
●	1-19	実方集	〔江戸中期〕写	大仮一冊	三五〇
●	1-20	匡衡集	〔江戸中期〕写	大仮一冊	三八二
●	1-21	藤原長能集	〔江戸中期〕写	大仮一冊	三四三
●	1-22	定頼卿集	〔江戸中期〕写	大仮一冊	三四七
●	1-23	橘為仲朝臣集	〔江戸中期〕写	大仮一冊	三四二
●	1-24	金槐和歌集	貞享四年刊	半一冊	三四一

第二部 季鷹の文芸活動		書名	書写／刊行年次	書型冊数	整理番号 *備考
●	2-1	雲錦翁家集	天保二年序刊	大四冊	七八一
●	2-2	山麓集并統山麓集抜書	享保二〇年写	半仮一冊	四九四
●	2-3	万葉和歌集	宝永六年刊	大二〇冊	一二
●	2-4	万葉集類句	〔江戸後期〕写	大仮一冊	七九七
●	2-5	万葉集類句	文化三年刊	大三冊	五六五
●	2-6	和字正濫鈔	元文四年刊	半五冊	五一六
●	2-7	和字正濫要略	〔江戸中期〕写	大一冊	一〇四一
●	2-8	本朝文粹	正保五年刊	大一五冊	五二四
●	2-9	新撰万葉集	寛文七年刊	大二冊	三三
●	2-10	八景詩歌	〔江戸中期〕写	大仮一冊	四三四
●	2-11	論語集註・孟子集註	〔明〕刊カ	大四冊	一一
●	2-12	基綱卿抄出	〔室町後期〕写	半一帖	一〇
●	2-13	竹取物語	〔慶長〕刊	大一冊	*古活字版 五
●	2-14	宇津保物語	寛政三十八年写	大二〇冊	六
●	2-15	春曙抄	延宝二年奥刊	大六冊	六一
●	2-16	東大寺三蔵什物写	〔江戸中期〕写	一軸	A三四
第三部 上賀茂社家としての山本家		持明院家色紙式	〔江戸中期〕写	特大一冊	一二八
●	3-1	古筆名物集	〔江戸中期〕写	横仮一冊	一四三
●	3-2	書札	〔江戸初期〕写	一軸	一
●	3-3	妙法院宮真仁法親王懷紙	〔江戸中期〕写	一幅	A一七
●	3-4	岡本豊彦画松図 (季鷹九十賀)	〔江戸後期〕写	一幅	A三一
●	3-5	久世通根画鶴	〔江戸中期〕写	一幅	A一五

◎ 国指定重要文化財
● 京都市指定文化財

主要参考文献一覽

- 『有栖川宮諸大夫伝』（写一冊、国立国会図書館蔵）
- 『有栖川宮総記』（高松宮蔵版、一九四〇年）
- 賀茂別雷神神社史料編纂会編『賀茂別雷神神社史料 絵図』（賀茂別雷神社、二〇一八年）
- 井上宗雄ほか編『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九九年）
- 和歌文学大辞典編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇二四年）
- 森繁夫『人物百談』（三宅書店、一九四三年）
- 森本元子『私家集の研究』（明治書院、一九六六年）
- 宮川葉子『源氏物語の文化史的研究』（風間書房、一九九七年）
- 川上新一郎『六条藤家歌学の研究』（汲古書院、一九九九年）
- 堀川貴司『瀟湘八景 詩歌と絵画に見る日本化の様相』（国文学研究資料館編 原典講読セミナー八、臨川書店、二〇〇二年）
- 盛田帝子『近世雅文壇の研究―光格天皇と賀茂季鷹を中心に』（汲古書院、二〇二三年）
- 藤本孝一『賀茂季鷹所蔵本古今和歌集下・紙背文影印』（日本史料研究会研究叢書一六、日本史料研究会、二〇一四年）
- 下橋敬長述・羽倉敬尚注『幕末の宮廷』（東洋文庫三五三、平凡社、一九七九年）
- 藤本正直・須磨千穎『賀茂神主補任史』（財団法人賀茂県主同族会、一九九一年）
- 谷省吾・金土重順編『賀茂別雷神神社三手文庫今井似閑書籍奉納目録』（神道書目叢刊二、皇學館大学神道研究所、一九八四年）
- 浅見徹・乾善彦・谷本玲大編『新撰万葉集』諸本と研究（和泉書院、二〇〇三年）
- 盛田帝子編『国立台湾大学図書館蔵賀茂季鷹『雲錦翁家集』』（台湾大学蔵全文刊本五、国立台湾大学図書館、二〇一四年）
- 徳満澄雄『賀茂真淵著「源氏物語新釈」関係資料の検討』（『高知女子大学紀要 人文・社会科学編』二八号、一九八〇年三月）
- 徳満澄雄『「源氏物語新釈」の成立過程について』（『高知女子大学紀要 人文・社会科学編』二九号、一九八一年三月）
- 小林一彦『歌枕見て参れ―実方説話を遠望する』（『魚津シンポジウム』二一号、洗足学園魚津短期大学、一九九六年三月）
- 盛田帝子『賀茂季鷹の生い立ちと諸大夫時代』（『語文研究』八六・八七号、九州大学国語国文学会、一九九九年六月）
- 盛田帝子『賀茂季鷹の能宣歌謡写説―文化十年石清水臨時祭再興逸事』（京都大学国文学論叢』九号、京都大学大学院文学研究科国語国文学研究室、二〇〇二年二月）
- 藤本孝一・万波寿子『山本家典籍目録―賀茂季鷹所持本』（『京都市歴史資料館紀要』二二号、京都市歴史資料館、二〇〇七年三月）
- 曽根誠一『正保三年刊整版本「竹取物語」本文の成立―依拠した古活字本の検討』（『花園大学日本文学論究』七号、花園大学日本文学会、二〇一四年二月）
- 盛田帝子『家集を出版すること―賀茂季鷹「雲錦翁家集」を巡って』（『近世文藝』二〇六号、日本近世文学会、二〇一七年七月）
- 岩坪健『源氏八景の本文』（『同志社国文学』八八号、同志社大学国文学会、二〇一八年三月）
- 盛田帝子『東都における宮廷文化再興の系譜―吉宗・宗武から景雄・季鷹・千蔭へ』（『日本文学研究ジャーナル』三三号、古典ライブラリー、二〇二三年九月）
- 盛田帝子『安永天明期における王朝文化の復興―古典知の再創造と人的交流―』（『日本文学』七一巻七号、日本文学協会、二〇二三年七月）
- 盛田帝子『十八世紀の物合復興と『十番虫合絵巻』』（『かがみ』五一号、大東急記念文庫、二〇二三年三月）
- 盛田帝子『十八・十九世紀における王朝文学空間の再興』（盛田帝子編『古典の再生』、文学通信、二〇二四年三月）
- 『上賀茂町なみ調査報告』（京都市都市計画局、一九七八年）



京都市歴史資料館
2024年度(令和6年度)特別展

賀茂季鷹と古典の「知」

京都市歴史資料館寄託山本家資料展

主催 京都市歴史資料館
共催 京都産業大学
人間文化研究機構 国文学研究資料館
発行日 2024年10月19日
発行 人間文化研究機構 国文学研究資料館
京都産業大学日本文化研究所
編集 小林一彦^{かずひこ}・松中博^{かんちく}・神作研一^{かんとく}・中西智子^{ちとこ}
制作 株式会社ビー・シー・シー

©2024 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館
本書の全部または一部を無断にて転載・複製することを禁じます。